
リキュアオールスターズAnother Story ~ キュアブラック、光の使者の新たな戦い ~

ファウストK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアオールスターズAnother Story\キュアブラック、光の使者の新たな戦い\

【Nコード】

N5126U

【作者名】

ファウストK

【あらすじ】

世界の支配者コンカロードとの戦いで命を落とした、美墨なぎさ
「キュアブラック。自らの力の無さを思い知り、絶望に陥った彼女の前に現れたのは……」
大切な人を守る為に今、キュアブラックの新たな戦いが始まる！

プロローグ「あの日の出来事」

街中を、一人の少女が走っていた。

彼女の視線の先には、黒髪の少女と金髪の少女が立っていた。

少女「ほのかー！ひかりー！遅くなつてごめん！」

茶髪の少女は2人の名を呼ぶと、息を切らしながら2人の元へたどり着いた。

ひかり「大丈夫ですよ。私達も今来たところですから。」

金髪の少女ひかりが、彼女に優しく微笑む。

少女「本当？」

ひかり「はい。」

ほのか「それに、なぎさが遅れるなんていつものことじゃない。」

黒髪の少女ほのかが、彼女にそう言った。

少女「ほのか、酷いよ。」

ほのかにそう言われ、少女はがっくりと肩を下ろした。

そんな彼女を見て、ほのかとひかりはクスツと笑みを浮かべた。

彼女の名は美墨なぎさ。

私立ベローネ学院に通う、15歳の少女。

そして誰が呼んだか伝説の戦士プリキュア、光の使者キュアブラックその人であった。

彼女は、普段はどこにでもいそうな少女だが、実はプリキュアとして世界を守る為に親友の雪城ほのか、九条ひかりと共に日々戦っているのだ。

そんななぎさだったが、彼女は現在とある気持ちを抱いていた。

なぎさ「・・・やっぱり、このままじゃ駄目・・・もっと・・・もっと強くならないと・・・！」

彼女がこのような想いを抱くようになったのには、ある理由があっ

た。
それは彼女自身にとってとても大きく、決して忘れることの出来ないものだった。

話は、一カ月前に遡る。

忘れもしない、プリキュア全員で世界の支配者コンカロードとの決戦に挑んだ、あの日のことである。

ブラック「がはっ………!」

ホワイト「なぎさ!」

ラス「ふん。」

コンカロードの部下ラスとの戦いの最中、一つの命が消えようとしていた。

ブラックはラスの剣によって体を貫かれ、生死を彷徨う状況にあった。

ホワイト「なぎさ!なぎさ!」

そんなブラックにホワイトは必死で呼び掛けるが、それも虚しくブラックは目を閉じてしまった。

ホワイト「なぎさ!」

もちろん、何度呼び掛けてもブラックが返事をする様子はない。

ホワイト「…なぎさ!駄目よ!死んじゃ駄目!私達の力を、あいっに見せてやるんじゃないの!?こんなところで壊される程、私達の絆って弱かった!?ねえ!なんとか言っつてよ!なぎさ!」

それでも微動だにしないブラックを前に、ホワイトは涙を流した。

ホワイト「なぎさ……なぎさ……」

ブラック「(……ほのか……?)」

薄れゆく意識の中、ブラックはホワイトの声に気付いた。

ブラック「(……ほのか……泣いてる……助けなきゃ……
……あれ……おかしいな……体が……自由に……動かない……私……行かなきゃいけないのに………駄目……な

んだか・・・眠くなつて・・・き・・・た・・・」

そして、キュアブラック「美墨なぎさは死んだ。」

プロローグ「あの日の出来事」(後書き)

次回、パイレーツ登場。

第1話「海賊現る」(前書き)

遂に始まりました、ブラックの物語。

まずは前作、「プリキュアVS世界の支配者」のもう一つの物語をお楽しみください。

第1話「海賊現る」

ブラック「……あれ……?」

意識が不安定なまま、ブラックは目を覚ました。

ブラック「……体が動く……私、生きてる……?」

しかし、すぐにその考えが間違いだとわかった。

ブラック「……!何……これ……」

目の前には、異様な光景が広がっていた。

空も大地も、木や花や建物さえも、ブラック以外の全てが闇に包まれたかの様に漆黒に染まっていた。

ブラック「ここは一体……」

???「ブラック!」

そこへ、誰かが話し掛けてきた。

ブラック「え……?」

すぐさまブラックが声のした方を向くと、そこにはレモネード、サンシャイン、ミント、ルージュが立っていた。

ブラック「レモネード!サンシャイン達も!」

ブラックは立ち上がり、4人の元へ駆け寄った。

仲間に会えて安心するブラックだったが、そんな彼女にルージュが暗い表情で話し出す。

ルージュ「……ブラックも……ここに来ちゃったんですね……」

ブラック「え……?」

ブラックは最初その言葉の意味がわからなかったが、すぐに気が付いた。

レモネードを初め、ここにいる4人はコンカライドの部下との戦いで既に命を落としていたのだ。

ブラック「もしかして、ここは……」

ブラックの言葉に、レモネードが重い口調で答えた。

レモネード「……死後の世界……ですよね……」

その言葉で、ブラックは全てを理解した。

ブラック「……！！」

とても信じられなかったが、現に自分より先に命を落としたレモネード達は全員ここにいる。

これは紛れもない事実なのだ、ブラックはようやく状況を受け入れた。

ブラック「そつか……やっぱり私……死んだんだ……」

サンシャイン「ブラック……」

ブラック「……ねえ……私達、これからどうしたらいいの……？」

ミント「それは……私達にもわからないの……」ブラック「そ……そんな……」

自分に出ることが無いと知り、落ち込むブラック。

するとその時、突然地面が震え始めた。

ブラック「え……！？」

サンシャイン「な……何！？」

そして大きな音と共に地面が割れ、そこから全身が真っ黒に染まったザケンナーとホシイナーが現れた。

ザケンナー「ザケンナー！」

ホシイナー「ホシイナー！」

ルージユ「どうしてザケンナーやホシイナーがここに！？」

サンシャイン「きつと……私達に倒されたザケンナー達の怨念が、実体となつて現れたんだと……！」

サンシャインが説明を終えるのを待たずに、ホシイナーが4人に襲い掛かった。

ルージユ「……っ！」

素早く攻撃をかわしたルージユとミントに、ザケンナーが攻撃を仕掛ける。

ザケンナー「ザケンナー！」

ルージユ「ざけんなですって……こっちのセリフよ！」

ザケンナーの攻撃をかわしたルージユは、両腕を交差させた後、必殺技を放った。

ルージユ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

ルージユの放った炎の球は真つ直ぐザケンナーへと飛んでいき、勢いよく命中した。

ルージユ「よし！」

ミント「・・・ルージユ！待って！」

見ると、攻撃を受けたはずのザケンナーは無傷の状態で2人を見下ろしていた。

ルージユ「なんで！？確かに直撃したはずなのに！」

ザケンナー「ザケンナー！」

ミント「危ない！」

ルージユに襲い掛ろうとするザケンナーに、ミントは必殺技を放つ。

ミント「プリキュア！エメラルドソーサー！」

ミントの放ったエネルギー弾はザケンナーに命中するも、全く効いている様子は無かった。

ミント「そんな！？」

ザケンナー「ザケンナー！」

ホシイナ「ホシイナー！」

その隣で、レモネードとサンシャインもホシイナに苦戦していた。サンシャイン「くっ・・・！プリキュア！ゴールドフォルテ・バースト！」

ホシイナ「ホシイナー！」

サンシャインの必殺技を顔面に食らい、ホシイナはその場に倒れた。

しかし、すぐにその体が動き始めかと思うと、何事も無かったかのように再び2人の前に立ちはだかった。

サンシャイン「そんな・・・！」

レモネード「生き返った・・・！？」

ホシイナ「ホシイナー！」

その瞬間、ホシイナーはうろたえる2人を勢いよく殴り付けて吹っ飛ばした。

レモネード、サンシャイン「きゃあああああ!!」
ザケンナー「ザケンナー!」

ミント、ルージュー「うあああああ!!」

同様に、ミントとルージューもザケンナーによって殴り飛ばされ、4人はブラックの元に転げ落ちた。

ブラック「みんな!くっ・・・!!」

苦しむ4人に、またしてもザケンナーとホシイナーが襲い掛かる。

ブラック「ここは退散した方が良さそうね・・・!」

そう言うと、ブラックは右手に力を込め始めた。

ブラック「プリキュア!ブラックパンチ!」

ブラックが勢いよく地面に向かってパンチを放つと、そこから土煙が上がった。

そして、土煙がおさまった時には4人の姿は消えていた。

ブラック「・・・はあ・・・はあ・・・ここまで来ればもう大丈夫・・・かな・・・?」

ブラックは4人を連れて、先程の場所から離れた所に逃げ延びていた。

ブラック「みんな、大丈夫?」

サンシャイン「ええ・・・なんとか・・・」

しかし、4人の体は既に傷だらけになっていた。

ブラック「(今あいつらが現れたら、確実にピンチだ・・・こうなったら、私がみんなを守らないと・・・!)」

するとその時、どこからか足音が聞こえた。

ブラック「・・・!誰!?!」

呼び掛けても返事は無く、足音は徐々に大きくなっていく。

ルージュー「まさか、もう追ってきたの!?!」

ブラック「っ・・・!!」

ブラックが身構える中、音の主は暗闇の中からその姿を現した。
サンシャイン「・・・!?あれは・・・?」

そこに現れたのは、ザケンナーでもホシイナーでもない一人の少女
だった。

長い深紅の髪型をし、片目に眼帯を付けたその姿は、まるで海賊と
呼ぶに相応しい外見をしていた。

ミント「貴方は誰?何者なの?」

???「・・・私は・・・」

ミントの問いに対し、謎の少女はゆつくりと名乗った。

???「変革を呼ぶ自由の海賊、キュアパイレーツ。」

キュアパイレーツ、目の前にいる少女は確かにそう名乗った。

レモネード「・・・キュア・・・パイレーツ・・・?」

サンシャイン「どうして、こんなところにプリキュアが・・・?」

しかし、2人が疑問に思っているのには目もくれず、パイレーツは
ブラックの方を向いた。

パイレーツ「・・・」

ブラック「な・・・何?」

パイレーツ「・・・貴方が、キュアブラック?」

ブラック「そう・・・だけど・・・?」

パイレーツ「・・・はあっ!」

するとその瞬間、パイレーツはいきなりブラックに襲い掛かった。

ブラック「え?うわあ!」

素早くパイレーツのパンチをかわすブラックだったが、パイレーツ
は構わず攻撃を続ける。

ブラック「ちよっ・・・!貴方、いきなり何なの!?!」

パイレーツ「戦いに集中しなさい!」

ブラック「ええ!?!」

わけがわからないまま、ブラックはパイレーツと肉弾戦を始める。

ブラックは序盤こそ互角の戦いを繰り広げていたが、徐々にパイレ
ーツの攻撃に押され気味になってきた。

ブラック「くっ・・・！」

焦るブラックをよそに、パイレーツは一向に攻撃を止めようとしな
い。

パイレーツ「どうしたの？私はまだ半分も力を出してないわよ！」

ブラック「・・・言ってくれるじゃない・・・！」

そう言つてブラックはパイレーツの胸にキックを放つと、素早く彼
女の元を離れた。

ブラック「誰だか知らないけど、私をあまりなめないでほしいわね
！」

パイレーツ「あら、私はてつきり全力かと思つてたけど、違つなの？」

ブラック「・・・！貴方・・・！！！」

パイレーツ「仕方ないわね・・・ちよつと痛いわよ。」

そう言つと、パイレーツは剣に似た形をした武器とマイクロチップ
の様な物を取り出し、チップを剣に差し込んだ。

パイレーツ「プリキュア！ファントムスローター！」

その瞬間、パイレーツの姿が視界から消えたかと思うと、突然ブラ
ックの体が何かに切られていった。

ブラック「うあああああ！」

レモネード「ブラック！」

すぐにレモネード達が駆け寄ろうとするが、一瞬だけ立ち止まった
パイレーツににらまれて止められてしまった。

パイレーツ「邪魔しないでくれる？」

レモネード「は・・・はい・・・。」

そしてパイレーツは、再びブラックを切り付けていく。

ブラック「くっ・・・！！！」

パイレーツ「・・・ま、所詮こんなところかしらね。」

一通りダメージを与えたのを確認したパイレーツは攻撃をやめると、
後ろを向いてその場を立ち去ろうと歩き始めた。

ブラック「っ！まだ負けるもんですか・・・！！！」

ブラックはパイレーツに気付かれないように、右手に力を込めた。

ブラック「（後ろがから空きよ！）」

そう思いながら、ブラックはパイレーツめがけて走りだした。

ブラック「（プリキュア！ブラックパンチ！）」

そして、ブラックが高く飛び上がってパイレーツにパンチを決めようとしたその時、ブラックはあることに気付いた。

パイレーツは左手に携帯の様な物を持ち、更に右手にはなにやら鍵の様な物を握っていた。

ブラック「何・・・？あれ・・・」

すると、パイレーツは黙って携帯に鍵を差し込んだ。

『キュアムーン、ライト！』

携帯から声がしたその瞬間、パイレーツの姿は一瞬の内にしてキュアムーンライトへと変化した。

ミント「えっ・・・！？」

サンシャイン「あれは！？」

ブラック「なっ・・・！」

ムーンライト（？）は振り向くやいなや、ムンタクトをブラックの目の前に突き付けた。

ブラック「しまっ・・・！」

ムーンライト？「プリキュア！シルバーフォルテウェイブ！」

ブラック「・・・！！きゃあああああ！」

零距离で必殺技を食らったブラックは、そのまま勢いよく吹っ飛ばされてしまった。

レモネード「ブラック！」

ムーンライト？「・・・」

それを見届けたムーンライト（？）はパイレーツの姿に戻った。

一方で、サンシャインに抱き起こされたブラックは無惨にも傷だらけの状態となっていた。

サンシャイン「ブラック！」

ミント「しっかり！」

ブラック「・・・うう・・・」

そして、ブラックはそのまま気を失ってしまった。

第1話「海賊現る」(後書き)

次回、パイレーツのご紹介

第2話「変革を呼ぶ自由の海賊」

なぎさ「……………あれ？ここは……………」

目を覚ましたなぎさは、街中に一人立っていた。

周りでは、人々がいつもと変わらぬ日常を過ごしている。

なぎさ「……………夢…だったの？」

どうにもすっきりしない気分でなぎさが辺りを見回すと、少し離れたところにほのかを見つけた。

なぎさ「ほのか！ほのかーっ！」

何故か悲しそうな表情で俯いているほのかに向かって、なぎさは走りながら笑顔で話し掛ける。

しかし、ほのかはなぎさが何度話し掛けても全く返事をしようとなない。

更に、それだけではなかった。

なぎさがほのかに触れようとしたその瞬間、なぎさの手はほのかの体を一瞬の内に擦り抜けてしまったのだ。

なぎさ「え……………」

理解出来ない謎の事態を前にし、戸惑うなぎさ。

しかし、更に衝撃の事態が彼女を襲う。

戸惑うなぎさが思わず自分の腕を見ると、なんと見る見る内に彼女の体が消滅を始めていた。

なぎさ「な、何これ……………ありえない……………！ほのか！ほのか……………」

しかし、ほのかにはなぎさの声は聞こえてないらしく、全く反応がない。

なぎさ「ほのか！気付いて！」

必死の呼び掛けも虚しく、なぎさの体は徐々に消えていき、そんな彼女に気付かないままほのかは歩き始め、どんだなぎさの元を離れていく。

なぎさ「い・・嫌・・ほのか!ほのか!」

ほのかの姿が小さくなる頃には、なぎさの体はほとんど消滅を終えていた。

なぎさ「ほのか!ほのか!ほのかああああああ・・・・・
・・・!」

「・・ツク!ブラック!」

ブラック「・・・!!!ここは・・・」

サンシャイン「よかった・・やっとなきた・・」

ブラックはサンシャインの声で再び目を覚ました。

ブラック「・・サンシャイン・・みんなも・・」

ふとブラックが周りを見ると、いつの間にかやって来たのであろう、ベリーとパッションも加わっており、いずれも、ブラックを心配するような表情で見つめていた。

パッション「ブラック、大丈夫?」

ベリー「かなりうなされてたけど・・何かあったの?」

ふいにブラックは、ついさっき見た夢を思い出した。

ブラック「う・・うん、何でもない・・・・それより、あいつは?キュアパイレーツはどこに?」

サンシャイン「あ・・彼女は・・」

するとそこへ、キュアパイレーツがやって来た。

パイレーツ「やっとなきたわね。」

ブラックは立ち上がり、パイレーツと見つめ合う。

ブラック「・・」

パイレーツ「・・」

レモネード「あ・・あの・・」

ブラックとパイレーツが見つめ合っているところへ、レモネードが話し掛ける。

パイレーツ「・・・何かしら？」

レモネード「キュアパイレーツ・・・貴方は一体、何者なんですか？」

パイレーツ「・・・」

パイレーツは少し黙った後に突然変身を解き、ショートヘアの赤髪の少女へと変わった。

「??」「私の名前は海東湊。」

そう言っつて、キュアパイレーツ⇨海東湊はブラックに向かって話し始める。

湊「キュアブラック、それに貴方達もよく聞きなさい。私は貴方達を助けに来たのよ。」

その言葉に全員が耳を疑った。

ベリー「私達を・・・助けに・・・？」

湊は話を続ける。

湊「私は、人類を滅ぼそうと企むとある組織と密かに戦いを続けてきた。そんな中、私は世界の支配者コンカロードの存在を知り、これを止めようと試みたけど駄目だったわ。それに、私が来た時には既に貴方達はコンカロードの部下に敗れてこの世界に来てしまったもの。」

プリキュア達は何も返す言葉が出なかった。

湊「私はどうにかして貴方達を助けようと、プリキュアの力でここまでやって来たわ。」

ミント「・・・一体、どうやって死後の世界に？」

湊「簡単よ、私にはこれがあるから。」

すると、湊はとあるプリキュアを模した小さな人形の様な物を取り出した。

湊「このプリキュアキーには、貴方達プリキュアの記憶と力が宿っているの。私が今ここにいるのも、このプリキュアの力によるものよ。」

レモネード「なるほど・・・」

その時、突然地面が割れてザケンナーとホシイナーが再び現れた。
ルージュ「またあいつら！くっ！」

すると、湊はザケンナー達の方を向いた。

湊「ちょうどいいわ。□で言うのも面倒だし、今から私の力を見せてあげる。よく見ておきなさい。」

そう言うて湊はパイレーツのプリキュアキーを取り出して鍵の形に変形させると、携帯型アイテムのキュアモバイラーを取り出してプリキュアキーを差し込んだ。

湊「プリキュアチェンジ！」

『キュア、パイレーツ！』

その瞬間モバイラーから光が放たれ、湊は一瞬でキュアパイレーツへと変身した。

パイレーツ「変革を呼ぶ自由の海賊！キュアパイレーツ！」

高らかに名乗りを上げると、パイレーツは剣型の専用武器キュアカトラスを取り出してザケンナーに向かっていった。

パイレーツ「派手にいってやるわ！」

ザケンナー「ザケンナー！」

ザケンナーはパイレーツめがけてパンチを放つが、パイレーツ素早くかわしてザケンナーの頭上に飛び乗った。

パイレーツ「覚悟しなさい！」

そう言うてパイレーツは、先程ブラックに使用したマイクロチップの様な物を取り出した。

パイレーツ「これはプリキュアチップと言って、プリキュアキーと同じくプリキュアの力が宿っているのよ。これを使って・・・」

パイレーツはプリキュアチップをカトラスに差し込んだ。

パイレーツ「プリキュア！ファントムスローター！」

そう技名を叫んだ瞬間、パイレーツは目にも止まらぬスピードでザケンナーを切り付けていく。

ザケンナー「ザケンナー！？」

攻撃を受けたザケンナーはゆっくりと仰向けに倒れるも、一瞬で再

び立ち上がった。

ミント「駄目！やっぱり既に肉体が死んでるから、倒せないんだわ！」

しかし、パイレーツは焦ることなく笑みを浮かべ、ザケンナーの前に立った。

パイレーツ「だったら・・・浄化すればいいだけのこと！」

そして、パイレーツはプリキュアキーを取り出すとモバイラーに差し込んだ。

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

『キュゥア、ピーチ！』

そして、光と共にパイレーツの姿はピーチの姿へと変化した。

パッション「ピーチ!?!」

サンシャイン「ううん・・・あれが、彼女だけが使える力・・・プリキュアチェンジ・・・」

P.ピーチ「いくわよ！」

パイレーツの変身したピーチはピーチロッドを取り出して構えた。

P.ピーチ「プリキュア！ラブサンシャイン・・・」

ザケンナー「ザケンナー！」

P.ピーチ「フレッツシュ！！！」

襲い掛かるザケンナーに向けてピーチは必殺技を放ち、ザケンナーに命中させた。

ザケンナー「ザ、ザケンナー！！！」

さすがのザケンナーもこれには適わず、技を受けたザケンナーは光となって消滅した。

ルージュ「す・・・凄い・・・」

ホシイナ「ホシイナ！」

ザケンナーを倒したピーチはパイレーツの姿に戻った。

ホシイナ「ホシイナ！」

そこへ、今度はホシイナが襲い掛かる。

パイレーツは、別のプリキュアキーをモバイラーに差し込んだ。

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

「キュア、ブロッサム！」

そして、パイレーツはブロッサムに変身した。

Pブロッサム「プリキュア！ピンクフォルテウェイブ！」

ブロッサムタクトを取り出したブロッサムは、ホシイナーに向けて必殺技を放った。

ホシイナー「ホシイナー！！！」

ホシイナーは、ザケンナーと同様に光となって消滅した。

Pブロッサム「ふう・・・」

ブロッサムはパイレーツの姿へと戻った。

パイレーツ「私の実力、わかってくれたかしら？」

ベリー「ええ・・・」

パイレーツ「・・・話を戻しましょうか。」

ブラック「待ちなさい！」

パイレーツが再び話そうとしたその時、突然ブラックが制止した。

パイレーツ「何かしら？」

ブラックは、強い口調でパイレーツに問いかける。

ブラック「貴方、私達を助けに来たって言ってたけど、それならどうして私を襲ったの！？説明してよ！」

レモネード「そう言えば・・・どうして・・・」

パイレーツ「・・・キュアブラック、実は私は今までに何度か貴方の戦いを見てきたの。」

ブラック「え・・・？」

パイレーツ「貴方の戦いぶりを見て私は確信したわ。貴方は他のプリキュアよりも強力な力を持つてる。貴方ならきつと私達プリキュアにとって心強い存在になってくれるって。だから私は、何があっても貴方だけは絶対助けるって決めたの。」

しかし、その瞬間パイレーツは表情を曇らせる。

パイレーツ「・・・でも、どうやら私の思い違いだったみたいね。」

ブラック「・・・！どうして・・・！」

パイレーツ「どうして？さっきの戦いを忘れたの？」

ブラック「うっ……」

パイレーツ「実際に戦ってわかったわ。今の貴方は全く話にならないってことが。」

ブラック「……そ……そんなことない！さっきはいきなり攻撃されて冷静な判断が出来なかったのよ！もう一度戦えば私が勝つ！キユアパイレーツ、貴方に再戦を申し込むわ！」

パイレーツ「……別に言いわよ。どうせ結果は同じでしょうけど。」

ブラック「その減らず口、すぐに言えなくしてやるわよ！」

レモネード「ブラック、大丈夫ですか？」

ブラック「平気よ……！」

パイレーツ「……」

ブラックとパイレーツは他のメンバーと距離をとると、互いに睨み合った。

第2話「変革を呼ぶ自由の海賊」(後書き)

次回、プリキュアキーがブラックに牙を剥く!

第3話「プリキュアキー大暴れ！」（前書き）

大丈夫かな・・・こんなことして・・・

第3話「プリキュアキー大暴れ！」

ドリーム「りんちゃん!？」

ルージュ「え!？」

ミント「まさか、のぞみさん!？」

驚くルージュ達の前には、死後の世界にやって来たドリームがいた。ルージュ「のぞみ! あんたまさか……!」

ドリーム「ごめんね、みんな……私、負けちゃった……でも大丈夫! この世界でだって、きっと何か出来ることがあるはずだもん!」

ドリームは笑顔でそう言った。

ルージュ「うん……でも、今はちょっとそれどころじゃないのよね……」

ドリーム「え……?」

ドリームがルージュ達の視線の先を見ると、そこにはブラックとパイレーツがお互いに睨み合っていた。

ドリーム「ブラック!? それに、あの子は誰なの!？」

すると、ブラックがこちらを睨んできた。

ブラック「ドリーム! 説明は後ですから今は黙って!」

ドリーム「え……うん……」

そして、ブラックは再びパイレーツと対峙する。

パイレーツ「どうしたの? かかってきなさいよ。」

まるで挑発するかの様に、パイレーツはブラックに呼び掛けた。

ブラック「その余裕も今の内よ……はああ!」

立ち尽くしているパイレーツに向かって、ブラックは勢いよく飛び掛かった。

ブラック「はあっ!」

まずブラックはパイレーツめがけてパンチを放つが、パイレーツは難なくかわすとカトラスを取り出してブラックに切り掛かった。

ブラック「なんの！」

ブラックはカトラスによる一撃をかわすと、一旦パイレーツと距離をとった。

パイレーツ「あら？もしかして・・・怖じ気付いた？」

その言葉が、更にブラックを挑発させた。

ブラック「さつきから聞いてれば・・・あなたの言うことがいちいちむかつくのよ！」

パイレーツ「・・・で？どうするの？」

ブラック「決まってるでしょ！私は貴方を倒してみせる！」

そう言つて、ブラックは右腕に力を込め始める。

ブラック「はああああ・・・！！！」

同時にパイレーツもプリキュアキーを取り出して身構える。

ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

パイレーツ「プリキュアチェンジ。」

ブラックが走りだしたのとパイレーツがキーを差し込んだのはほぼ同時だった。

「キュア、スピリット！」

そしてパイレーツは、別世界のプリキュア、キュアスピリットへと変身した。

ベリー「誰？あのプリキュア!？」

ミント「わからない・・・多分あの子、私達の知らないプリキュアにも変身出来るんだわ・・・」

パイレーツの変身したキュアスピリットは、専用武器フィシカルグローブを取り出して右腕に装着し、ブラックに向かって構えた。

ブラック「はあああああああ！」

Pスピリット「プリキュア！スピリット・ウインド！」

スピリットが技名を唱えると同時に、二人のパンチが勢いよく衝突した。

しかしその瞬間スピリットの右腕から竜巻が発生し、一瞬でブラックを吹き飛ばした。

ブラック「うああああ！」

ブラックは大きく飛ばされるも、すぐに立ち上がってスピリットに向かっていった。

Pスピリット「プリキュアチェンジ。」

「キュア、ナイト！」

それでもスピリットは表情を変えることなく次のプリキュアキーを使い、また別の世界のプリキュアであるキュアナイトに変身した。

Pナイト「ふん！」

ロッド型の専用武器イリユージョンロッドを取り出したナイトはブラックを迎え撃つ。

ブラック「はっ！」

まずブラックがナイトに蹴りを放つが、ナイトはロッドで蹴りを受け止めると素早くロッドを振り回してブラックの背中を攻撃した。

ブラック「うぐっ！」

攻撃を受けたブラックは一瞬怯むが、すぐに体制を整える。

そしてロッドを掴むと、逆に勢いよく振ってナイトの体制を崩させた。

ブラック「はああ！」

そこへすかさずパンチを放つが、ナイトは素早い動きでかわして後退すると、ロッドをブラックに向けて構えた。

Pナイト「ナイトシュート！」

ナイトはロッドから光線を放った。

しかし、光線はそのまま真っ直ぐブラックに命中するかと思いきや、ブラックの真横を通り過ぎていった。

ブラック「え！？」

ブラックは一瞬戸惑ったが、それがナイトの狙いだっただ。

ナイトは油断しているブラックの背後へ回り込むと、プリキュアキーを取り出してモバイラーに差し込んだ。

「キュア、ディリー！」

そのまま素早くキュアディリーへと変身し、持っていた杖をブラッ

クに突き付けた。

ブラック「・・・！」

Pディリー「ふん！」

電子音「ファイナルライド！デイデイデイデイリー！」

ディリーが杖にカードをスキャンした瞬間、杖からマゼンタの花が現れて回転しながらブラックを攻撃した。

ブラック「う・・・うあああああ！」

当然、無防備だったブラックは攻撃をまともに受けて大きく吹っ飛ばされた。

ブラック「ま・・・まだまだよ！」

それでも、ブラックはパイレーツに挑もうとする。

Pディリー「ふうん、まだやるつもりなんだ・・・」

ブラックが立ち上がるのを見たディリーは、プリキュアキーをモバイラーに差し込んだ。

Pディリー「プリキュアチェンジ。」

「キュゥア、テンペスト！」

キュアテンペストに変身し、ゆっくりとブラックと距離を縮める。

Pテンペスト「はっ！」

ブラック「うっっ！」

そして、勢いよくブラックの腹にパンチを放った。

テンペストはブラックが後退するのを見て、専用武器テンペストスタッフを取り出した。

ブラック「くっ・・・！」

Pテンペスト「プリキュア！テンペストストライク！」

テンペストがスタッフを地面に突いた瞬間、膨大なエネルギーが発生してブラックを襲った。

ブラック「うあああああ！」

Pテンペスト「プリキュアチェンジ。」

「キュゥア、エクス！」

間髪入れずにテンペストはプリキュアキーを使い、キュアエクスに

変身すると右腕に装備したエクスソードの刀身を展開してブラックに迫る。

Pエクス「プリキュア！エクスソード・スラッシュ！」

ブラック「くっっ…まずい！」

エクスはブラックを袈裟懸けに斬ろうと剣を振り下ろしたが、ブラックは素早く動いてなんとかわかした。

Pエクス「はああ！」

しかし、エクスは休むことなくブラックに切り掛かっていく。

その度にブラックは剣をかわそうと動き続けるが、度重なるダメージの為に動きが鈍り、遂に剣による一撃で僅かだが肩を斬られてしまった。

Pエクス「とどめよ。」

ブラック「っ…！絶対…！負けないんだから！」

間一髪剣をかわしたブラックはエクスの胸にキックを放ち、そのまま再び距離をとった。

ブラック「うっ…！」

しかし、気が付けばブラックは体のあちこちが傷だらけとなり、思わずよろめいてしまった。

そんな彼女に、なおもエクスは攻撃をしかけようとする。

その状況に、今まで黙っていたドリーム達が声を上げた。

レモネード「パイレーツ！もう止めてください！」

ドリーム「そうだよ！これ以上やったらブラックが…！」

サンシャイン「お願いだから攻撃を止めて！」

ベリー「もう勝負はついてるじゃない！」

ブラック「…まだよ…！！！」

ベリーの言葉を聞いたブラックは、強い口調で言い放った。

ブラック「まだ勝負はついてないわよ！私、まだ負けてないもん！」

そう言ってブラックは、右足にエネルギーを込め始める。

同時にエクスも、プリキュアキーを取り出してモバイラーに差し込んだ。

「キュア、エルス！」

エルスはブラックと同じように、右足にエネルギーを込める。そして、エネルギーを溜め終えた時2人は同時に飛び上がり、同時に相手に向けてキックを放った。

ブラック「プリキュア！ブラックキック！」

Pエルス「プリキュア！ライジングクラッシュ！」

自らの出せる限りの力を込めたブラックのキックと、電撃を纏ったエルスのキックは空中で衝突し、強烈な閃光を発生させた。その光の前に、ドリーム達は目を眩ませた。

そして光が治まった時、勝負を制していたのは・・・

ブラック「うあああ！」

エルス「いや、パイレーツだった。」

Pエルス「・・・」

エルスはパイレーツの姿へと戻った。

それと同時に、ブラックはなんとか立ち上がる。

しかし立ち上がった瞬間、ブラックは目の前にカトラスを突き付けられた。

ブラック「・・・！」

そしてその先では、パイレーツが冷たい視線でこちらを見ていた。

ブラック「くっ・・・！」

パイレーツ「・・・貴方の負けね。」

パイレーツは冷淡な声でそう言うと、カトラスを下げた。

パイレーツ「どう？貴方と私の力の差、わかってもらえたかしら？」

ブラック「っ・・・」

何も返す言葉が出ないブラックに、パイレーツは話し続ける。

パイレーツ「これでわかったでしょ？今貴方を救ったところで、何の意味も無い。はつきり言って無駄よ。」

ブラック「・・・！！！」

その言葉を聞いて、ブラックはショックを受けた。

パイレーツ「・・・悔しかったら、早く強くなって私に勝つことね。」

そう言い残すと、パイレーツはその場を去ろうと歩きだした。

レモネード「あ！」

ドリーム「待ちなさい！」

それを追って、ドリームとレモネードも走りだす。

あとには、ブラックを含め6人のプリキュアが残されたが、全員がとてもブラックと話せるような状況ではなかった。

ブラックは地面に膝をつくと、思い切り地面を殴り付けた。

ブラック「っ……………うっ……………うっ……………」

そして、悔しさのあまり大粒の涙を流した。

ブラック「うっ……………うあああああああああああああ！」

暗い世界に、ブラックの叫び声が響き渡った。

第3話「プリキュアキー大暴れ！」（後書き）

次回、死後の世界の刺客現る。

第4話「パイレーツの戦い」

ブラック達の元を離れたパイレーツは、一人死後の世界を歩いていた。

パイレーツ「……………」

????「パイレーツ!」

そこへ、ドリームとレモネードが追い付いた。

パイレーツ「…何の用かしら?」

レモネード「用も何も、酷すぎます!」

レモネードの言葉に、パイレーツはとぼけた様に答える。

パイレーツ「酷い? 一体何のことかしら?」

レモネード「とぼけないでください! ついさつき貴方がブラックにやっただ事です!」

ドリーム「あんな一方的にいたぶるやり方、いくらなんでも酷い! あれじゃブラックが可哀想だよ!」

パイレーツ「可哀想……? 何を甘えたことを……」

そう言うと、パイレーツは強い口調で2人に話し始めた。

パイレーツ「私だつて軽い気持ちでやつてるんじゃないのよ。それに相応しい相手じゃなきゃ、何もするわけないでしょ。第一、再戦を申し込んできたのはあの子の方じゃない。」

ドリーム「それにしたつて……!」

パイレーツ「……この際言っておくわね。もしさつきブラックが私に勝ったところで、私は彼女に何もしなかったわよ。」

レモネード「そんな……! それじゃ最初から助けるつもりなんて無かつたんじゃないですか!」

パイレーツ「言つたでしょ。助けるのならそれに相応しい相手じゃなきゃ助けないつて。どっちにしろ、今のあの子は助けるに全く値しない。これだけは変えようの無い事実よ。」

ドリーム「そ……そんなことない! ブラックは……なぎさんはそ

んな人じゃないもん！なぎささんはいつだってほのかさんや私達を元気にしてくれる凄く優しい人だもん！貴方になぎささんを馬鹿にする資格なんて全く無いんだから！」

レモネード「ドリーム、落ち着いてください！」

ドリーム「でも……！」

パイレーツ「はあ……話にならないわ。」

そう言つてパイレーツが呆れながらその場を立ち去ろうとした、その時だった。

パイレーツ「……！2人共、その場から離れて！」

ドリーム「え？」

パイレーツ「早く！」

必死で呼び掛けるパイレーツを見て、2人はすぐ言われた通りその場を離れた。

するとその瞬間、空から二つの黒い影が落ちてきたかと思うと、先程までドリームとレモネードが立っていた場所に落下した。

そしてそこに現れたのは、やはり全身が漆黒に染まったウザイナーとナケワメーケだった。

ウザイナー「ウザイナー！」

ナケワメーケ「ナーケワメーケ！」

パイレーツ「……！」

更にパイレーツがよく見ると、ナケワメーケの頭の上に2人の人影が見えた。

ナケワメーケが動きを止めると、人影は頭上から飛び降りてパイレーツ達の前に立った。

「……ふふ……見つけましたよ、プリキュア。」

現れた2人の男の内、細身で眼鏡をかけた方の男が口を開いた。

ドリーム「誰なの！？貴方達！」

すると、体の大きい強面の方の男が答えた。

「……俺達は、この世界を支配する覇者！俺はウィンド！」

「……私はヘルプレスと申します。」

パイレーツ「死後の世界の覇者さんが私達に何か御用でも？」

ワインド「決まっているだろう！俺達は貴様らプリキュアの命をもらいに来たのさ！」

レモネード「!?」

ドリーム「なんですって！」

ヘルプレス「説明しましょう。私達2人は共にこの世界で生まれ、共にこの世界で育ってきました。」

ワインド「どこにも行くところがなかった俺達は、ある時暇つぶしに、死んだ連中を襲って息の根を止めてやった。それがきっかけで俺達2人のことはたちまちこの世界で噂となり、挑戦者もかなりやって来た。」

ヘルプレス「そして私達はその全てに勝利し、いつしかこの世界最強の存在となりました。」

ワインド「その時俺達は誓ったのさ、全てを終えてこの世界にやって来た奴らを俺達が導いてやるってな！」

ヘルプレス「そして今日、私とワインドはこの世界にあの伝説の戦士プリキュアが来たと聞きつけました。もっとも、あのプリキュアともあるう者達が本当に来たのかと最初は疑いました。そこでザケンナー達を送り込んだところ、見事に貴方達はその存在を知らせてくれたという訳ですよ。」

レモネード「あのザケンナー達は貴方達が!?」

ワインド「そうだ。プリキュア共に倒されて彷徨っていた怨念を俺達が回収し、強化してやったのさ。」

パイレーツ「で？私達の命を奪ってどうする気？」

ワインド「俺達はこの世界の支配者だ。今後も支配者であるという立場を維持するには貴様らプリキュアは邪魔者なんだよ！」

そう言うやいなや、ワインドは持っていた短刀でレモネードに切り掛かった。

パイレーツ「危ない！」

そこへパイレーツが割り込み、カトラスで短刀を受け止める。

レモネード「パイレーツ!?!」

ワインド「ほう、俺の攻撃を受け止めるとは……」

そう言つてワインドは笑みを浮かべると、後退してウザイナーの頭上へと飛び乗つた。

ワインド「ヘルプレス!あの赤髪のプリキュアは俺がやってやる!お前は残りを相手してやれ!」

ヘルプレス「了解。ナケワメーケ、行け。」

そしてヘルプレスは後ろへ下がり、ナケワメーケに命令した。

ウザイナー「ウザイナー!」

ナケワメーケ「ナーケワメーケ!」

そして、ウザイナーとナケワメーケは共にパイレーツ達に襲い掛かる。

パイレーツ「プリキュアチェンジ!」

「キュア、メロディ!」

キュアメロディにプリキュアチェンジしたパイレーツは、ベルティエを取り出してウザイナーを迎え撃つ。

Pメロディ「プリキュア!ミュージッククロンド!」

ベルティエから光のリングが放たれウザイナーを攻撃するが、例のごとくウザイナーは攻撃が直撃しても全く平気な顔をしていた。

ワインド「はっはっは!無駄だ!貴様らプリキュアの能力は既に調査済みなんだよ!」

Pメロディ「!?!」

驚くメロディにヘルプレスが話を続ける。

ヘルプレス「私達も何の準備も無しに貴方達に挑戦しに来たわけはありません。貴方達の活躍は何度も私達も見せてもらいました。

だからどんな攻撃をしようと無駄なのですよ。ナケワメーケ、優しく殺してやりなさい。」

するとナケワメーケは、苦戦しているドリームとレモネードを踏み潰そうと足を上げた。

Pメロディ「危ない!」

「キュゥア、アルガティア！」

メロディは別世界のプリキュア、キュアアルガティアに変身し、ナケワメーケに向けて銃を乱射した。

連続で狙撃されたナケワメーケはたまらず転倒した。

Pアルガティア「私達のこととは調べ尽くしたですって？じゃあこれならどうかしら？」

そう言つてアルガティアは、あるプリキュアのプリキュアキーをモバイラーに差し込んだ。

Pアルガティア「プリキュアチェンジ！」

「キュゥア、ミューズ！」

ワインド「何！？」

レモネード「あ・・あれは？」

彼女が変身したのは、正体不明（2011年7月現在）の謎のプリキュア、キュアミューズだった。

Pミューズ「ふん！」

ミューズは素早い動きで跳躍すると、ウザイナーめがけて連続でキックを放った。

ウザイナー「ウザイナー！」

危うく体勢を崩しかけるウザイナーに、ミューズは更に畳み掛ける。
Pミューズ「はあああ！」

ミューズの回し蹴りがウザイナーに直撃し、ウザイナーは転倒した。同時にワインドも、ウザイナーの頭上から飛び降りて身構えた。

それに応戦しようとするミューズだが、彼女の背後からナケワメーケが襲い掛かる。

Pミューズ「くっ・・プリキュアチェンジ！」

「ダク、ドリーム！」

ミューズは素早く振り向き、ダークドリームに変身した。

ドリーム「ダークドリームにも変身出来るの！？」

PDドリーム「はあっ！」

驚くドリームをよそに、ダークドリームはエネルギー弾を放ってナ

ケワメーケを攻撃し、怯んだところに勢いよくキックを繰り出して後退させる。

ナケワメーケ「ナケワメーケ！」

PDドリーム「とどめよ！プリキュアチェンジ！」

「ダク、プリキュア！」

レモネード「今度はダークプリキュア!?」

PDプリキュア「プリキュア！ダークフォルテウェイブ！」

ダークプリキュアが放ったエネルギー弾はナケワメーケを直撃し、ナケワメーケは呻き声を上げながら光となって消滅した。

ワインド「くそ！ウザイナー！」

ウザイナー「ウザイナー！」

ワインドの命令でウザイナーが襲い掛かる。

ダークプリキュアは変身を解いてパイレーツの姿に戻ると、カトラスを取り出して身構えた。

するとその時、ドリームとレモネードがパイレーツの前に立った。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

レモネード「プリキュア！プリズムチェーン！」

レモネードが放った光の鎖がウザイナーを拘束し、そこへ光を身に纏ったドリームが突撃していった。

ウザイナー「ウザイナー!?」

ドリーム「パイレーツ！今の内に必殺技を！」

パイレーツ「え!?」

ドリーム「早く！」

パイレーツ「わ・わかつたわ！プリキュアチェンジ！」

「ミルキィ、ローズ！」

Pローズ「ミルキィローズ・メタルブリザード！」

パイレーツが変身したローズはウザイナーに向けて必殺技を放ち、ウザイナーは氷のバラに包み込まれた後光となって消滅した。

ワインド「おのれ・こくなったらこの俺が！」

ヘルプレス「待て、ワインド。」

ウィンドは短刀を片手にパイレーツに襲い掛かろうとするが、ヘルプレスがそれを制止した。

ヘルプレス「ウィンド、ここは一旦退却して体制を整えよう。」

ウィンド「…仕方ねえな…。」

ヘルプレス「…と、言うわけなので、私達は一度帰らせていただきます。ですが、後ほどまたやって来ますのでその時は覚悟しておいてくださいね。では…。」

そう言つて、ヘルプレスとウィンドは一瞬で姿を消した。

レモネード「な…なんだったんでしょか…。」

ドリーム「さあ…。」

パイレーツ「…まずいわね…こんな時に面倒な連中が現れるなんて…ここはなんとしても、ブラックに早く強くなつてもらわないと…！」

そう思い、パイレーツはブラック達のところへ戻ろうと振り向いた。パイレーツ「…。」

しかしその必要は無かった。

パイレーツの目の前に、いつの間にかブラックが立っていたのだから。

ブラックは、敵意に満ちた表情でパイレーツを睨んでいた。

パイレーツもそれに対抗してブラックを睨み返す。

ブラック「(今度こそ…勝ってみせる!)」

パイレーツ「(今はこっちが先決ね…でも…駄目ね、あの子まだ…)」

パイレーツが考え終わるのを待たずに、ブラックはパイレーツに飛び掛かった。

第4話「パイレーツの戦い」(後書き)

次回、パイレーツがブラックに激怒

第5話「誰が為に戦う」

ブラック「はああああ！」

ブラックは素早く跳躍してパイレーツにキックを決めようとするが、その瞬間ブラックの右足はパイレーツに片手で掴まれてしまった。

ブラック「くっ・・・！」

パイレーツ「ふん！」

パイレーツは勢いよくブラックの足を振り回し、地面に思い切り叩きつけた。

ブラック「うああっ！！」更にパイレーツはカトラスを取り出し、

ブラックめがけて突き刺そうと攻撃を仕掛ける。

ブラック「っ・・・！」

ブラックはなんとかカトラスをかわすと、素早く立ち上がってパイレーツにパンチを放った。

しかし、そのパンチもパイレーツによつてあっさり受け止められてしまう。

パイレーツ「さっきも言ったはずよ、何度やっても同じだって。」

ブラック「くっ・・・そんなことない！」

ブラックは左手でパイレーツにパンチを放った。

そのパンチもパイレーツには受け止められてしまったが、ブラックはその隙について右手でパンチを繰り出し、連続でパイレーツにパンチを浴びせていく。

ブラック「はああああああ！」

パイレーツ「・・・」

しかし、パイレーツはブラックのパンチをことごとく受け止めていく。

ブラック「くっっ！」

パイレーツ「・・・駄目ね・・・」

そう言うとパイレーツは、ブラックの腹に蹴りを入れて彼女の体勢

を崩させた。ブラック「はっ・・・！」

痛みで思わず後退するブラックだったが、すぐに表情を変えて再びパイレーツに立ち向かっていった。

そんな彼女を、ドリームやレモネード、ブラックを心配して駆け付けたサンシャイン達はただ見守ることしか出来なかった。

ドリーム「ブラック・・・」

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

「キュア、トパーズ！」

キュアトパーズに変身したパイレーツはブラックのパンチを跳躍してかわすと、空中でエネルギーを溜めてブラックめがけて一気にキックを放った。

Pトパーズ「プリキュア！トパーズビッグバン！」

ブラックはキックで対抗しようかとも一瞬思ったがトパーズの動きがあまりにも速い為、素早くかわしてそのまま右腕にエネルギーを込め始める。

ブラック「さつきは破られたけど、今度こそ・・・！」

Pトパーズ「はあああ！」

ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

ブラックは右腕に力を込めて渾身のパンチを放った。

それに対し、トパーズはただブラックに向かって走ってくるだけだった。

ブラック「（何もしてこない！これなら・・・！）」

しかしその瞬間、トパーズは素早くブラックの背後に回り込んだ。

ブラック「はっ・・・！」

Pトパーズ「後ろがから空き、全然駄目ね。」

そう言っつて、トパーズはブラックの背中に勢いよくパンチを放った。ブラック「うあああああ！」

そして、ブラックはまたしても吹っ飛ばされてしまった。

パイレーツ「いい加減、力の差を理解したらどうなの？」

トパーズの姿から元に戻ったパイレーツが苛ついた様に言った。

ブラック「あんた、本当にむかつくわね．．．今度こそ！」
そこへ、ミントが駆け寄る。

ミント「ブラック、少し落ち着いた方が．．．」
ブラック「どいて！」

すると、ブラックはミントを突き飛ばして再び立ち上がった。

ミント「きゃっ！」

ルージュ「ミント！」

倒れたミントの元へ、ルージュが駆け付ける。

ベリー「ちよつとブラック！いくらなんでも今は．．．」

しかし、ブラックはベリーの声に耳を傾けることなくパイレーツに向かつていった。

ミント「っ．．．ブラック．．．」

サンシャイン「もしかして、私達の声が聞こえてないんじゃない．．．」

レモネード「そんな．．．」

そんな彼女達の心配をよそに、ブラックはなおもパイレーツに挑もうとする。

ブラック「うああっ！！！」

パイレーツの攻撃を受けて何度も倒されるブラック。

しかし、それでもブラックはパイレーツに勝とうと立ち向かっていく。

そんなブラックに、パイレーツはカトラスを取り出して身構えた。

ブラック「くっ．．．はあああああ．．．」

パイレーツ「ふん！」

ブラックがパイレーツに殴りかかろうとしたその時、パイレーツはカトラスでブラックを勢いよく切り付けた。

ブラック「がああっ．．．！！！」

ブラックは肩から流れる血を押さえつつ、その場に膝をついた。

ブラック「うぐっ．．．！ま．．．まだまだ．．．」

しかしそれでも立ち上がるうとするブラックを見て、遂にパイレーツの怒りが頂点に達した。

パイレーツはブラックの正面に立つと、彼女の胸ぐらを掴んで無理矢理立たせ、そして自らの怒りをぶつけた。

パイレーツ「何度やっても無駄だって言ってるでしょ!!!」

ブラック「なっ・・・!!」

パイレーツの突然の行動にブラックを含めた全員が驚いたが、パイレーツは気にすることなく続ける。

パイレーツ「さっきから何度も言ってるじゃないの! 貴方は私には勝てないって!」

ブラック「くっ・・・やってみなきゃわかんないじゃない! 見てなさい、私はあんたに絶対勝ってみせるんだから!」

パイレーツ「馬鹿!!!」

その瞬間、パイレーツはブラックの顔を思い切り殴って倒した。

ブラック「うっ!・・・何するのよ!」

立ち上がったブラックはさすが反撃しようとするが、パイレーツめがけて放ったパンチは簡単にかわされ、逆にパイレーツのパンチを腹にくらってそのまま倒れてしまった。

ブラック「ぐっ・・・!!」

苦しむブラックに、パイレーツは話を再開する。

パイレーツ「貴方は絶対私に勝てない・・・何故だかわかる?」

ブラック「何故って・・・!!」

パイレーツ「・・・今の貴方は、ただ自分のやりきれない怒りを周りにぶつけてるだけだからよ。誰かを逆恨みして、その感情を周りにあたり散らす・・・そんなやり方で本当にいいと思う?・・・今の貴方はもはやプリキュアなんかじゃない、怒りと憎しみに支配されたただの人形よ。」

ブラック「そんなこと・・・!!」

そんなことないと言おうとしたその時、ブラックはついさっきミントを突き飛ばしてしまったのを思い出した。

ブラック「わ・・・私・・・」

パイレーツ「・・・貴方はさっきから何度も私に勝とうとしてるけど、

それは何故なの？・私に勝てないのが悔しいから？私が憎いから？貴方が戦う目的って、私に勝つことなの？違うでしょ！？」

ブラック「……………」

何も返す言葉が出ないブラック。

パイレーツ「…何故私が貴方に戦いを挑んだか、わかる？」

ブラック「え…………？」

パイレーツ「貴方に、戦う理由を思い出してほしかったからよ。貴方はコンカロード達との戦いに敗れてこの世界に来た…………その時点で、既に貴方は大切なものを失っていた。だから私は、それを思い出させる為に貴方に戦いを挑んだの。だけど、貴方は私の想いには応えてくれなかった……………」

ブラック「……………」

パイレーツ「自分が戦う理由を、もう一度よく考えなさい。」

そう言つてパイレーツがその場を立ち去ろうとしたその時、突然頭上から何かが落下してきた。

パイレーツ「……………！」

素早くかわしたパイレーツが振り返ると、そこには全身真っ黒に染まったネガトーンと共にウィンドが立っていた。

ウィンド「約束通り来てやったぞ！プリキユア！」

突然の襲撃に、プリキユア達は全員身構える。

ルージユ「何なの！？あいつ！」

レモネード「私達を狙う、この世界の支配者です！」

ウィンド「お？さつきより増えてるじゃねえか。こいつはラッキー

だ。ネガトーン！全員まとめてやってしまえ！」

ネガトーン「ネーガトーン！」

サンシャイン「っ……………」

パイレーツ「…………ブラック、私から貴方に試練を与えるわ。」

ブラック「え…………？試練って……………」

パイレーツ「…………貴方に本当に戦う力があるのなら、あいつを倒して証明してみなさい。それが私からの最初の試練よ。出来るかしら

？」

ブラック「・・・やってみせるわよ・・・！」

ブラックは身体中の傷をこらえながら立ち上がり、ネガトーンとワインドの前に立ちはだかった。

ドリーム「ブラック！」

ワインド「ん？なんだ貴様、まさか貴様一人で俺の相手をするつもりか？」

ブラック「・・・だったら何？」

ワインド「面白い！ネガトーン、お望み通り相手してやれ！」

ネガトーン「ネーガトーン！」

ワインドの命令を受けたネガトーンは、ブラックめがけてパンチを放った。

ブラック「くっ！」

ブラックは素早くかわしてネガトーンの背後に回り込むと、ネガトーンの背中に勢いよくキックをたたき込んだ。

ネガトーン「ネガ！？」

ブラック「よし・・・今の内に・・・」

ネガトーンが怯んだ隙に、更にブラックは攻撃を仕掛けようとする。ワインド「させるか！」

しかしその瞬間、突然目の前に現れたワインドによって攻撃を阻止され、更にワインドは持っていた短刀でブラックの体を素早く切り付けた。

ブラック「うっつ！」

ワインド「ふん、馬鹿が！」

ブラック「っ・・・！」

次の攻撃を受ける前に、ブラックはすぐに後退した。

ブラック「はあ・・・はあ・・・うっつ・・・」

しかし体制を整えようとしたその瞬間、ブラックは地面に膝を着いてしまった。

パイレーツとの連戦で受けたダメージが、ここにきて一気に響いて

きたのだ。

パッション「あっ．．！」

サンシャイン「ブラック！」

ブラック「っ．．！」

ワインド「今だ！ネガトーン！」

ネガトーン「ネーガトーン！」

なんとか立ち上がるうとするブラックだが、その瞬間ネガトーンの右手に捕われてしまった。

ブラック「うあっ．．．！」

ネガトーンは怪力で徐々にブラックを握り潰そうとする。

ブラック「うう．．．！」

ドリーム「みんな！ブラックを助け．．」

パイレーツ「駄目よ。」

ドリーム達はブラックの危機に駆け付けようとするが、走りだした途端パイレーツに制止されてしまった。

ベリー「パイレーツ!？」

ルージュ「どうして止めるのよ！」

レモネード「急がないとブラックが！」

パイレーツ「悪いけど、今助けに行かれたら困るのよ。」

ミント「どうして．．．！」

パイレーツ「．．これはあの子に大切なものを思い出させる為の戦いな。だから、あの子が自分自身の力で乗り越えなければ意味がないのよ。」

サンシャイン「そんな．．．．．」

しかし、パイレーツ達がそうしてる間にもブラックは少しずつネガトーンの怪力に為す術も無く追い詰められていた。

ワインド「よし！ネガトーン、そろそろとどめを刺してやれ！」

ネガトーン「ネーガトーン！」

ブラック「っ．．．さすがに．．．限界．．．．．ほのか．．．

．．ほのか．．？」

するとその時、ブラックの脳裏に親友ほのかの顔が浮かんだ。

ブラック「…ほのか……！」

そしてブラックは思い出した。

パイレーツに初めて敗れた時に見た悪夢、そして、この世界へ来る直前に見たほのかの涙を。

ブラック「そうだ……私は……」

その様子に気付いたのか、パイレーツはブラックに大声で呼び掛けた。

パイレーツ「ブラック！私の質問に答えなさい！今の貴方なら答えられるはずよ！答えて！貴方は何の為に戦うの！？」

ブラック「っ……私は……ほのかや……みんなを守る為に……戦う！はあああああ！」

その瞬間、ブラックは全身に力を込めると、ネガトーンの右手を粉々に破壊して脱出に成功した。

ネガトーン「ネガッ！？」

ワインド「何！？」

そしてブラックは、痛みに耐えながらもネガトーンに連続でパンチを放ち、攻撃に耐えきれなくなったネガトーンはゆっくりと仰向けに倒れた。

ブラック「はあ……はあ……」

着地したブラックの元へ、パイレーツがやって来る。

ブラック「パイレーツ……」

パイレーツ「……よく言ったわね。」

ブラック「うん……うっ！」

しかし、ブラックは再びその場に倒れてしまった。

ワインド「くっ……！ネガトーン！やれ！」

ネガトーン「ネーガトーン！」

ネガトーンは立ち上がると、ブラックとパイレーツに襲い掛かってきた。

パイレーツ「まったく……」

パイレーツは倒れているブラックを見下ろしながら、プリキュアキ
ーをモバイラーに差し込んだ。

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

「キュゥア、ガイア！」

Pガイア「プリキュア！ガイアレイン！」

パイレーツはキュアガイアに変身すると、専用武器ガイアボウガン
を上に向けてそこから無数の矢を発射した。

矢はガイアの周囲に雨の様に降り注ぎ、そしてネガトーンとブラッ
クに次々と命中した。

ネガトーン「ネーガトーン！？」

ブラック「うっ・・・うあああああ！」

ドリーム「ブラック！」

そして、矢の雨が振り止むと同時にネガトーンは光となって消滅し
た。

一方、ブラックは・・・

ブラック「・・・ってあれ？傷が・・・回復してる？」

見ると、あれだけ傷だらけだったブラックの体は完全に回復してお
り、どこにも傷など無かった。

ブラック「どうして・・・？」

パイレーツ「ガイアレインはプリキュアには回復効果を与えるのよ。

「
ガイアの姿から元に戻ったパイレーツはそう言うと、ブラックに手
を差し伸べた。

パイレーツ「立てるでしょ？」

ブラック「・・・」

ブラックは何も言わずにパイレーツの手を握り、立ち上がった。

ワインド「おのれ・・・！」

ヘルプレス「おやおや、何やら妙なことになってますね。」

そこへ、全身が漆黒に染まったコワイナーと共にヘルプレスがやつ
て来た。

ウィンド「ヘルプレス！」

ヘルプレス「ウィンド、まとめて一気に始末してやりましょう。」

ウィンド「おうよ！」

パイレーツ「・・・ブラック。」

ブラック「ええ、わかってるわ。」

パイレーツとブラックは、共にヘルプレス、ウィンドと睨み合った。

パイレーツ「足引っ張るんじゃないわよ。」

ブラック「・・・貴方もね。」

2人は互いに笑顔で話すと、目の前の敵に向かって走りだした。

第5話「誰が為に戦う」(後書き)

次回、パイレーツとブラックが共闘！

第6話「ブラックの戦い」

ブラック、パイレーツ「はあああああ!!」「」

wind「ヘルプレス」「うおおおおお!!」「」

ブラックとパイレーツは共に走りだし、同時にwindとヘルプレスも2人に向かって襲い掛かった。

ブラック「はあああ!!」

wind「うおお!!」

大切な物を思い出したブラックは想いを胸に、windと格闘戦を繰り広げる。

wind「ふっ、またさっきと同じように苦しめてやる!!」

ブラック「私は・・もうさっきまでの私とは違うわ!!」

そう言って、ブラックはwindの体に思い切りパンチを放った。

パイレーツ「はあっ!!」

ヘルプレス「ふん!!」

その隣でパイレーツも、ヘルプレスと戦いを始めた。

剣で攻撃を仕掛けるヘルプレスに、パイレーツはカトラスで応戦する。

パイレーツ「くっ・・意外にやるわね。」

ヘルプレス「お褒めいただき光栄ですね。お礼として、貴方にはたつぷりと地獄を味わってもらいましょうか。」

パイレーツ「悪いけど遠慮するわ。私はまだまだやりたいことがいっぱいあるんでね!!」

パイレーツはヘルプレスを押し返すと、プリキュアキーをモバイルに差し込んだ。

パイレーツ「プリキュアチェンジ!!」

「キュア、バースト!!」

Pバースト「プリキュア!バースト・クラッシュ!!」

パイレーツはキュアバーストに変身し、両手から火球を発射しながら

らヘルプレスに向かっていった。

ドリーム「みんな、私達もいくよ！」

その様子を見ていたドリーム達も、2人に負けてられないと思い、全員でコワイナーに立ち向かっていった。

サンシャイン「ルージュ！」

ルージュ「オツケー！」

サンシャインとルージュは同時にジャンプしてコワイナーの頭上へと跳ぶと、2人でコワイナーの体にキックを放った。

コワイナー「コワイナー！」

しかし、コワイナーは全身に力を込めて2人を押し返した。

サンシャイン、ルージュ「うああああああ！！！」

ドリーム「2人共！」

ルージュ「くっ．．．やっぱ一筋縄ではいかないか．．．」

そこへ、コワイナーが体から触手を生やして襲い掛かる。

ベリー「危ない！プリキュア！エスポワールシャワー！」

素早くベリーがコワイナーに光線を放って動きを止めようとするが、コワイナーは技を受けても全く怯まず、そのまま触手でベリーに攻撃を仕掛けた。

ベリー「っ！」

サンシャイン「サンフラワーイージス！」

間一髪のところサンシャインが割り込み、バリアを張って攻撃を防いだ。

サンシャイン「くっ．．．！」

しかし、コワイナーの力は思った以上に強かった。

サンシャインのバリアはあっという間に破壊され、ベリーとサンシャインはその衝撃で大きく吹っ飛ばされた。

パッション「ベリー！サンシャイン！」

ドリーム「くっ．．．みんな！同時にいくよ！」

レモネード「はい！」

そして、ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、パッションは

5人でコワイナーを囲むと、武器を戻って一斉に飛び掛かった。
コワイナー「コワイナー！」

しかしその途端、コワイナーは全身から無数の触手を生やして5人を攻撃した。

ドリーム「うああ！」

5人はベリー、サンシャインと同様に吹っ飛ばされ、地面に倒れた。立ち上がるうとする彼女達だが、そこへコワイナーが邪悪なオーラを出しながら迫ってきた。

ミント「っ・・・こんなところで・・・」

コワイナーは、ドリーム達めがけて大きく触手を振り上げた。

その時、

????「プリキュア！サファイアアロー！」

????「プリキュア！ブルーフォルテウェイブ！」

突然コワイナーの頭上から水の矢と青いエネルギー弾が飛んできて、そのままコワイナーの体に命中した。

コワイナー「コワイナー！」

攻撃を受けたコワイナーが倒れたと同時に、上空から2人の人物がドリーム達の前に現れた。

ドリーム「アクア！」

サンシャイン「マリン！」

そこに立っていたのは、キュアアクアとキュアマリンだった。

マリン「ちよつとちよつと！やっとみんなに会えたと思ったら、何なのあれ!？」

アクア「落ち着いて！とにかく、まずはあいつを倒すわよ！みんな！」

ドリーム「はい！」

アクアの言葉で、ドリーム達も次々と立ち上がった。

同時にコワイナーも体勢を整え、プリキュア達と対峙する。

レモネード「皆さん、ここは全員で力を合わせていきませんか？1人の力じゃ無理でも、みんな一緒ならきつと倒せるはずですよ！」

パッション「そうね。ならまずは私達であいつを怯ませるましよう。

「
ミント「ええ。」

サンシャイン「じゃあ、私とレモネードはあいつの動きを止めるわ。

「
アクア「最後は私とドリームで決めるわよ。」

ドリーム「はい！」

作戦をまとめたプリキュア達は、各自それぞれの位置に立って構えた。

するとそこへコワイナーが襲い掛かる。

アクア「みんな！今よ！」

ベリーとパッションは専用武器を取り出し、ルージュとミントは両腕を交差させた。

ルージュ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

ミント「プリキュア！エメラルドソーサー！」

ベリー「プリキュア！エスポワールシャワー・・・フレイーツシュー！」

パッション「プリキュア！ハピネスハリケーン！」

マリ「マリ・・・シュート！」

5人の放った必殺技は一斉にコワイナーに命中し、わずかながら動きを止めることに成功した。

そこへすかさずレモネードとサンシャインが立ち向かう。

レモネード「プリキュア！プリズムチェーン！」

サンシャイン「プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

更にその瞬間、レモネードの放った光の鎖とサンシャインの放った光弾がコワイナーを拘束した。

サンシャイン「よし！」

レモネード「2人共！今です！」

そして、動けないコワイナーに両腕を交差したドリームと、5本のキュアフルーレを持ったアクアが飛び掛かった。

アクア「キュアフルーレ！ファイブアタック！」

まず、アクアが5本のフルーレで同時にコワイナーを切り付けた。
コワイナー「コワイナー！」

技を受けて苦しむコワイナーに、ドリームがとどめの一撃を放った。
ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

光を纏ったドリームの体当たりが顔面に命中し、コワイナーは倒れた。

アクア「よし！みんな、とどめよ！」

そう言つてアクアはフルーレをドリーム達に返し、プリキュア5はフルーレの先端を交差させた。

ドリーム「五つの光に！」

ルージユ、レモネード、ミント、アクア「「「勇気をのせて！！」」」

プリキュア5「「「プリキュア！！レインボーローズ・エクスプロージョン！！」」」

そして5人はフルーレから虹色のバラをコワイナーめがけて放ち、一瞬でコワイナーはバラの中に包み込まれた。

コワイナー「コワイナー！」

コワイナーはバラの力で浄化され、そのまま消滅した。

サンシャイン「やった！私達にも倒せた！」

パッション「ええ、これもレモネードのおかげね。」

レモネード「いえ、みんなの力を合わせたからこそ、こうして勝てたんです。」

アクア「そうね・・・ところで、一体何があったの？」

ドリーム「え？あつ！そうだ、ブラックは・・・！」

ブラック「うああああ！」

ドリーム「あつ！」

アクア「ブラック！？」

見ると、ブラックはウィンドを相手に苦戦を強いられていた。

ウィンド「へっ！ちょっとはやるかと思つたが、全然たいしたこと

ないな！」

ブラック「っ……！」

ブラックは痛みをこらえながら立ち上がるが、ウィンドの怪力にどう対抗すればいいかわからないでいた。

ウィンド「つまらん奴だな。そろそろとどめを刺してやるか……」
そう言うとウィンドは短刀を取り出してゆっくりとブラックに迫ってきた。

ブラックは後退して距離を置こうとするが、その瞬間ウィンドは彼女がけて走りだし、素早く彼女の肩を切り付けた。

ブラック「うっ！」

ウィンド「まだまだいくぜ！」

苦しむブラックにウィンドは更に襲い掛かるうとするが、ブラックは間一髪のところ短刀を掴んで受け止めた。

しかしその瞬間、ウィンドはもう片方の腕でブラックの腹にパンチを放った。

ブラック「がはっ……！」

ウィンド「へっ！」

とどめにウィンドはブラックをそのまま地面に倒れさせると、ブラックの腹を思い切り踏ん付けた。

ブラック「がああ……！」

ウィンド「馬鹿が……俺達に齒向かうからこうなるんだよ！」

そう言いながらウィンドは更に足に力を込めた。

ウィンド「ここいらで諦めて楽になっちまったらどうだ？どうせ貴様らはもう死んでるんだ。このまま全てを終わらせて、地獄で永遠

に生きた方が……」

ブラック「嫌よ……！」

ウィンドの言葉を遮り、ブラックは強い口調で言い放った。

ブラック「……ここで諦めるなんて絶対嫌よ……私には……」

・まだまだやりたいことがいっぱいあるんだから！」

そう言っつて自らを踏んでいるウィンドの足を両手で掴むと、そのま

ま持ち上げて一気に投げ飛ばした。

ウィンド「なっ……ぬおおおおお！」

投げ飛ばされたウィンドは勢いよく地面に激突しながらも、すぐに立ち上がるうとする。

ウィンド「おのれ……！！！」

その途端、立ち上がったウィンドに素早くブラックが攻撃を仕掛けてきた。

ブラック「はああああ！」

ブラックは驚いているウィンドに連続でパンチをたたき込んでいく。それに対してウィンドはどうにかして反撃を試みるが、ブラックの動きが速すぎる為、身を守るのが精一杯だった。すると、攻撃を続けながらブラックが口を開いた。

ブラック「私、まだ終わるわけにはいかないの！遊園地に行きたい！旅行もしたい！友達ももっと作りたい！おいしい物もいっぱい食べたい！好きな人のところにお嫁に行きたい！そして……私にはほのかに会いたい！！！」

ウィンド「くっ……何を言いだすかと思えば、そんなくだらないことか！」

ブラック「確かにあんたからして見ればくだらないかもしれない……けど、私にとってはすごく大事なことなのよ！」

そう言い放つと同時に、ブラックは右手に力を込めてパンチを放つた。

ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

ウィンド「っ……ぬああああ！」

ブラックのパンチを受け、ウィンドは大きく吹っ飛ばされた。

ウィンド「うう……！」

力を振り絞ってなんとか立ち上がるが、その瞬間ブラックが右足に精一杯の力を込めてキックを放ってきた。

ブラック「アーン……キック！！！」

ウィンド「うああっ……があああああ！！！」

ウィンドは再び吹っ飛ばされ、そのまま地面に激突することなく体が粉々に砕け散って消滅した。

ブラック「・・・絶対に・・・・・・・・ここから生き返ってやるんだから・・・・・・・・！」

ウィンドが倒されたのを見たヘルプレスは、衝撃を受けた。

ヘルプレス「なっ・・・・・・・・ウィンド!!」

相棒の死を信じられないでいるヘルプレスの元に、バーストから変身を解いたパイレーツがやって来た。

パイレーツ「あんた達の負けね・・・さ、次はあんたの番よ。」

ヘルプレス「おのれ・・・許さん！」

するとその瞬間、ヘルプレスは鎖を取り出してパイレーツを拘束した。

パイレーツ「・・・・・・・・」

ヘルプレス「よくも可愛い相棒を・・・もう許さん!こうなったら、貴様らにはたつぷり地獄を味わってもらおうか！」

ヘルプレスはさっきまでとは違う荒々しい口調でパイレーツに言い放ったが、そんな言葉を気にすることなくパイレーツは隠し持っていたプリキュアキーをモバイラーに差し込んだ。

「キュア、エクス！」

パイレーツはエクスに変身した瞬間、右腕のエクスソードで鎖をバラバラに切り裂いて拘束から逃れた。

ヘルプレス「なっ・・・・・・・・！」

Pエクス「あんたの言う地獄は全然たいしたことないわね。ちよつとここらで私が本当の地獄を見せてあげようかしら。」

ヘルプレス「ふん、やれるものならやってみろ！」

Pエクス「・・・言ったわね・・・」

そう言うとエクスは全身を赤く光らせ、いきなりヘルプレスめがけて走りだした。

ヘルプレスも剣を取り出して身構えるが、気付いた時にはエクスは両手に2本の短剣、キュアダガーを持って目の前に立っていた。

ヘルプレス「い・・・いつの間に!？」

Pエクス「プリキュア! エクスダガー・スピア!」

その瞬間、エクスは2本のキュアダガーを勢いよくヘルプレスの両手に突き刺した。

ヘルプレス「っ・・・があああああ!」

ヘルプレスは苦痛の叫びをあげると同時に痛みで思わず剣を落とすてしまった。

しかし、そんな彼をよそにエクスは次の攻撃体制に入る。

Pエクス「プリキュア! エクスサーベル・ハリケーンスラッシュ!」

エクスは両手に持った粒子加速剣、エクスサーベルで素早くヘルプレスを切り付けた。

一撃、また一撃とエクスの容赦ない攻撃が彼の体を傷つけていく。

Pエクス「ふん!」

更にエクスは攻撃を止めたかと思ったその瞬間、2本のエクスサーベルをヘルプレスの両肩に勢いよく突き刺した。

ヘルプレス「ぬああああ!」

Pエクス「・・・うるさいわね・・・!」

そう言うとエクスは更に2本の剣を両手に持ち、右手に持ったエクスロングブレイドをヘルプレスの足に突き刺した。

ヘルプレス「うああっ・・・!」

そしてエクスは、左手に持ったエクスショートブレイドを、足をやられて動きを封じられたヘルプレスの腹に思い切り深く刺した。

ヘルプレス「うっ・・・があっ・・・!」

更に苦しむヘルプレスだったが、エクスはエクスロングブレイドを足から抜き、彼の右胸に突き刺した。

それだけでなく、ヘルプレスから離れたエクスは右腕のエクスソードをライフルモードにし、ヘルプレスめがけて何発もの銃弾を撃ち込んだ。

ヘルプレス「っ・・・ああ!」

声にならない悲鳴をあげるヘルプレスに、エクスはとどめの一撃を

仕掛ける。

P エクス「はああああっ！」

そして、エクスはソードモードに変形させたエクスソードで、ヘルプレスの体を真つ二つに切り裂いた。

ヘルプレスはそのまま体が粉々に砕け散り、消滅した。

エクスの姿から元に戻ったパイレーツが後ろを振り向くと、ブラック達が驚いた様にこちらを見ていた。

パイレーツ「ふう、どうにか片付いたわね。」

ブラック「え．．．ええ．．．．．」

ブラックは笑って返すが、内心ではパイレーツの力に若干の恐怖を覚えていた。

レモネード「それにしてもブラック、格好よかったです！」

ミント「ええ、あそこまで自分の気持ちをぶつけられるなんて簡単に来ることじゃないわ。」

ブラック「そんなことないよ。私はただ、ほのかに会いたくて．．．」

「

その瞬間、ブラックの脳裏を何かがかすめた。

ブラック「え．．．．．？」

マリ「ブラック？どうしたの？」

ブラック「．．．ううん．．．．．なんでもな．．．」

なんでもないと言おうとしたその時、再び何かがブラックの脳裏をかすり、更にそれに加えて微かに誰かの悲鳴が聞こえた。

ブラックには、それが誰のものかすぐにわかった。

ブラック「．．．ほのか．．．．．？」

アクア「え．．．？」

ドリーム「一体どうしたの？」

ブラック「わからないけど．．．ほのかが．．．ほのかが危ない．．．！」

第6話「ブラックの戦い」(後書き)

次回、ブラックに新たな試練が。

第7話「一番大事な人」

レモネード「ほのかさんが危ないって……どういうことなんですか？」

ブラック「わからない……けど……なんだかすごく嫌な予感がするの……」

ベリー「それって一体……」

ドリーム「……もしかしてほのかさん達、現実世界でピンチに陥ってるんじゃない？」

ブラック「えっ!？」

ミント「まさか……」

アクア「でも、その可能性は否定出来ないわね……」

ブラック「そんな……ほのか……」

ブラックは不安のあまり、地面に膝をついた。

パッション「こうしてる間にも、現実世界ではみんなが命懸けで戦ってるのに……」

ルージュ「っ!死んだ私達には何も出来ないなんて!」

パイレーツ「そうでもないわよ。」

サンシャイン「え……?」

ルージュが悔しさのあまり地面を殴り付けたのと同時に、今まで口を閉ざしていたパイレーツが口を開いた。

サンシャイン「……パイレーツ、そうでもないって……何か方法があるの?」

パイレーツ「ええ、簡単なことよ。私がこの死後の世界に来た時と同じ方法を使うの。」

マリ「なにになに?どんな方法?」

パイレーツ「まあ見てて、プリキュアチェンジ!」

「キュゥア、コズミック!」

パイレーツはプリキュアキーを使ってキュアコズミックに変身し、

それと同時にコズミックの背後に巨大な灰色のオーロラが出現した。
Pコズミック「世界を越えられるこのオーロラを通って、現実世界
に行くのよ。」

パツション「本当にそんなことが出来るの？」

Pコズミック「本当よ。現に私はそのおかげでここにいるんだもの。」

サンシャイン「確かに……。」

Pコズミック「ただし、現実世界に行けるといっても貴方達は既に
肉体が死んだ魂だけの存在だから向こうのプリキユア達に貴方達の
姿は見えないし、実質陰からサポートする程度しか出来ないでしょ
うけどね。」

レモネード「それでも、黙って見てるだけよりましです。」

ドリーム「うん。行こう、みんな。」

そう言つてドリーム達がオーロラをくぐるうとしたその時、パイレ
ーツが彼女達の前に立って制止した。

Pコズミック「待ちなさい、貴方達が行く必要はないわ。」

ルージュ「な・何言つてんのよ！」

しかし、コズミックはルージュを無視してブラックの方を向いた。

Pコズミック「ブラック、貴方が行きなさい。」

ブラック「え……？」

Pコズミック「私から貴方への第二の試練よ。現実世界へ行きな
さい。」

ブラック「私1人で……？」

Pコズミック「ええ。そこで、貴方の一番大事な人を助けて来な
さい。」

ブラック「一番大事な人……。」

ブラックの脳裏に、即座にほのかの顔が浮かんだ。

Pコズミック「どうするの？」

ブラック「……いいわ、行ってやるうじゃないの。」

Pコズミック「……決まりね。」

ブラックは立ち上がると、オーロラに向かって歩きだした。
Pコズミック「あ、言い忘れてたけど、向こうの世界にいる時間は限られてるからね。」

ブラック「わかったわ。」

そして、ドリーム達が心配そうに見つめる中、ブラックはオーロラをくぐり抜けていき、それと同時にオーロラも消滅した。

ドリーム「ブラック・・・」

パッション「私達も、ブラックと一緒に戦いたいの・・・」

Pコズミック「駄目よ、これはあの子への試練。あの子が自分の力で乗り越えなきゃ意味ないのよ。」

ミント「でも・・・私達には見てるだけしか出来ないなんて・・・」

Pコズミック「・・・」

コズミックは、何も答えなかった。

ブラック「・・・ここは・・・」

気が付くとブラックは、さっきまでとは違う場所にいた。

つい先程自分が命を落としたあの場所である。

ブラック「あれは・・・」

壁際に横たわる自らの亡骸を見て、ブラックは現実世界への帰還と自らの敗北を再確認した。

????「きゃあああ!!」

すると、近くから聞き覚えのある声が悲鳴となって聞こえた。

ブラック「今のは!？」

ブラックが悲鳴のした方を振り向くと、ホワイト、ルミナス、ブライト、ウインディが、コンカロードの部下ラスを相手に苦戦を強いられていた。

ブラック「ホワイト!みんな!」

ブライト「くっ・・・なんて威力なの・・・!」

どうやら本当にブラックの声は聞こえてないようだ。

そこへ、ピーチ、パイン、ブロッサム、ムーンライトも到着した。

パイン「みんな！大丈夫！？」

ピーチ「あいつが最後の十闘士ね！いくわよ！」

ブラック「…みんな…頑張って…」

しかし、そんなブラックの想いに反するかのように、ホワイト達は次第にラスに追い詰められていく。

ブラック「…！」

ラスはゆっくりとホワイト達に迫っていく。

ピーチ「…っ…あと少しなのに…」

ブロッサム「くっ…！」

ラス「プリキュア…さらばだ…！」

ブラック「…助けたい…でも、どうすれば…」

ブラックは、自分に何が出来るか分からず立ち止まってしまった。するとその時、

ホワイト「…っ…なぎさ…！」

ホワイトが、とっさに自分の名を叫んだのをブラックは聞き逃さなかった。

ブラック「…ほのか…！」

ブラックがホワイトの声に気付くと同時に、ラスはホワイト達にとどめを刺そうと攻撃体制に入った。

ブラック「そうはさせない！」

気が付くと、ブラックは無意識のうちにラスに飛び掛かっていた。

ブラック「はああああ！」

ブラックはラスの正面まで来ると、その巨体を精一杯の力で押さえ付けた。

ラス「…！？なんだと…！」

突然動きを止められて混乱しているラスを、ブラックは出来る限りホワイト達から遠ざけようと試みた。

ホワイト「…なぎさ…？」

ブラック「え…？」

するとその時、背後から再びホワイトの声がした。

ブラックが振り向くと、ホワイトは明らかにブラックの方を向いていた。

ブラック「もしかして・・・私が見えてる・・・？」
しかし、ブラックにそんなことを考えている暇は無かった。

彼女の体が突然光り始めたかと思うと、徐々に消滅し始めたのだ。

ブラック「もう・・・時間切れか・・・」

ブラックは最後にもう一度ホワイトの方を向くと、彼女に向かってつぶやいた。

ブラック「ほのか、待っててね・・・私、絶対またほのかに会えるよう頑張るから・・・」

そう言うと同時に、ブラックは現実世界から姿を消した。

ブラックが姿を消す直前、ホワイトがひそかに「ありがとう」と言ったのだが、当の本人は気付いていなかった。

その後、知らない間にブラックに助けられたホワイト達は力を合わせて見事ラスを倒したのであった。

再び死後の世界に戻ってきたブラックを、パイレーツが出迎えた。

パイレーツ「どうだった？」

ブラック「・・・」

パイレーツ「・・・その様子だと上手くやれたみたいね・・・第二の試験、合格よ。」

ブラック「ええ！」

ドリーム「ブラック！」

そこへ、ドリーム達もやって来た。

ドリーム「ブラック、大丈夫!？」

ブラック「うん。この通り全然平気。」

ミント「よかった・・・」

レモネード「私達、ずっと心配してたんですよ？」

ブラック「ありがとう、みんな・・・？」

ルージュー「ブラック？」

ブラック「みんな・・・どうしたの？それ・・・」
ドリーム「え？」

ブラックに指摘されたドリーム達がふと自分達の体を見ると、いつの間にか体が青白く光っていた。

ベリー「何よこれ・・・！」

パイレーツ「・・・どうやら、貴方達がここにいられるのもあと少しみたいね。」

マリリン「えっ!?!」

サンシャイン「それって、もしかして・・・」

パイレーツ「・・・ブラック、帰ってきたばかりでしんどいかもしれないけど、この通りもう貴方達には時間が無いの。貴方さえ良ければ、今から最後の試練を受けてほしいんだけど・・・どう？」

ブラック「最後の・・・試練・・・」

ブラックは少し悩んだ様にも見えたが、すぐにパイレーツの方を向いて言った。

ブラック「いいわ。最後の試練、受けてやろうじゃない。」

パイレーツ「・・・その返事を待ってたわよ。」

そう言っただけパイレーツは、後ろを向いて歩きだした。

パイレーツ「貴方に心の準備が出来てるのなら、ついて来なさい。」

そして、パイレーツは暗闇の中に消え、ブラックもそれに続くように歩きだした。

ドリーム「待って、ブラック！」

すると、いきなりドリームがブラックを呼び止めた。

ブラックが振り向くと、ドリーム達は心配そうな表情でブラックを見つめていた。

ブラック「ドリーム・・・みんな・・・」

ドリーム「ブラック、やっぱりいくの？」

ブラック「うん、ここまでできたからには、やるしかないでしょ！」

レモネード「だったら、私達も一緒に・・・」

ブラック「ありがとう・・・でも大丈夫、私は絶対負けなから。み

んなはここで待っててね。」

ドリーム「ブラック・・・」

ブラック「じゃあ、行ってくるね。」

そして、ドリーム達を残してブラックは暗闇へと消えていった。

第7話「一番大事な人」(後書き)

次回、最後の試練始まる！

第8話「最後の試練」(前書き)

今回と次回、展開が「ゴークイジャー」っぽくなっていますが、長い目で見ていただければ幸いです。

第8話「最後の試練」

ブラックは最後の試練を受ける為、パイレーツの元へと向かった。しかし、残されたドリーム達は全員が遣り切れない想いでいっぱいだった。

ドリーム「行っちゃったね・・・ブラック・・・」

レモネード「・・・私達、また置いてきぼりですね・・・」

パッション「ブラックがあんなに頑張ってるのに・・・私達、ブラックに何もしてやれてない・・・」

サンシャイン「パイレーツは、ブラックが自分の力で乗り越えないと駄目って言うってた。だけど・・・」

ルージュー「・・・やっぱり、私達もブラックに何かブラックにしてあげたい・・・」

ベリー「うん・・・でも、どうする?」

マリン「うん・・・」

ミント「ブラックを信じて待つしかないのかしら・・・」

自分達にしてやれることがわからず、途方に暮れるドリーム達。すると、アクアが口を開いた。

アクア「・・・ねえみんな、ずっとここで悩んでるのもあれだし、ちよつとこの世界を散歩してみない?どうやらもうすぐこの世界ともお別れみたいだしね。」

ドリーム「え・・・?」

アクアのその言葉に、全員が耳を疑った。

ルージュー「ちよつ・・・!何言ってるんですか!どう考えても今はそんなことしてる場合じゃないでしょ!」

マリン「そうだよ!今ブラックは1人で必死に戦ってるんだよ!なのにアクアは何とも思わないの!?!」

アクア「ま・・・待ってよ。みんな、それについて私にいい考えがあるの。」

ミント「本当!？」
アクア「ええ、あのね……」

その頃、ブラックはパイレーツの元へとたどり着いていた。

パイレーツ「…待ってたわよ。」

ブラック「……」

パイレーツ「その目……準備は出来たみたいね。」

ブラック「ええ、いつでもオツケーよ。」

パイレーツ「じゃあ……最後の試練、始めるわよ。」

そう言うとパイレーツは、何やら銃に似た武器を取り出し、ブラックもそれと同時に素早く身構えた。

ブラック「あれは……?」

ブラックが銃をよく見ると、銃には5本のプリキュアキーが差し込まれていた。

パイレーツ「貴方にはまだ言っていなかったわね。プリキュアキーにはこういう使い方もあるのよ。」

そう言ってパイレーツはブラックに銃を向け、引き金を引いた。

その瞬間、銃口から五つの光が放たれたかと思うと、それらはブラックの目の前でそれぞれ人の形へと変化した。

ブラック「なっ……!」

そこに現れたのは、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミント、ダークアクア、そしてキュアリベリオンといった5人のプリキュア達だった。

ブラック「これは……」

ブラックが驚愕していると、中央に立つリベリオンが巨大な鎌を取り出し、次の瞬間勢いよく振って赤黒の業火をブラックに向けて放った。

ブラック「危な……!」

素早くかわすブラックだったが、そこへダークプリキュア5が一斉に襲い掛かってきた。

ブラック「くっ・・・こうなったら全員まとめて倒してやるわよ！」
そう言うと同時に、ブラックはダークプリキュア5に向かって走りだした。

ブラック「はああああ！」

最初に襲い掛かってきたのはダークルージュだった。

ブラックとダークルージュは互いにパンチを放って相手を怯ませようとするが、力は互角らしく2人のパンチは目の前で勢いよく衝突した。

ブラックはそのままもう片方の腕でパンチを仕掛け、同時にダークルージュも再びブラックにパンチを放ち、お互いに一步も引かない攻防を続ける。

すると、突然ダークレモネードが飛び上がり、2人にめがけて三日月型のエネルギー弾を脚から放った。

ブラック「くっ・・・！」

間一髪のところまで2人共攻撃をかわしたが、その瞬間ダークアキラが剣を持ってブラックに襲い掛かってきた。

ダークアキラはブラックを切り付けようと勢いよく切り掛かる。

ブラック「そうはいかないんだから！」

そう言うとブラックはジャンプして剣をかわし、すかさずダークアキラの胸にキックを放って彼女を後退させた。

しかし、ダークアキラが後退すると同時にダークルージュとダークミントがブラックの前に立ちはだかり、2人同時にブラックめがけて必殺技を放った。

ブラック「・・・！」

次の瞬間、ダークルージュの放った炎とダークミントの放った無数のエネルギー弾がブラックを襲った。

ブラック「う・・・うあああああ！」

攻撃を受け、ブラックは悲鳴をあげる。

幸い直撃はしなかったものの、ブラックにダメージを与えるには十分な威力だった。

ブラックはなんとか立ち上がるが、そこへすかさずダークレモネードが襲い掛かる。

ブラック「くっっ！」

連続でキックを放ってくるダークレモネードに、ブラックもパンチで応戦する。

ブラック「このおおお！」

そして、ブラックの渾身のパンチがダークレモネードを吹っ飛ばした。

ブラック「よし・・・」

しかし、ブラックに休む暇を与えることなくダークアクアがブラックの背後から襲い掛かった。

ブラック「しまった・・・！」

ブラックが気付いた時にはもう遅かった。

次の瞬間ダークアクアは、剣で勢いよくブラックの胸を切り付けた。ブラック「うああっ！」

剣による一撃をまともに受けたブラックは続けて現れたダークルージュに思い切り蹴飛ばされ、吹っ飛ばされた後地面に激突した。

ブラック「うぐっ・・・！」

立ち上がるうとするブラックに、ダークレモネードとダークミントが容赦なく必殺技を放つ。

ブラック「っ・・・あああああ！」

悲鳴をあげながら再び倒れるブラックを、5人のプリキュア達は一斉に囲んだ。

そして、リベリオンが鎌を振り上げゆっくりとブラックに迫ろうとしたその時、ブラックが不意に笑みを浮かべた。

ブラック「・・・ふふ・・・呆れちゃうわね・・・私、全然弱いじゃない・・・こんなじゃ、ほのかに笑われるよ・・・」

ブラックは痛みをこらえながら立ち上がると、リベリオン達に向かって言い放った。

ブラック「悪いけど、私もうこれ以上負けるわけにはいかないの！」

貴方達に勝って絶対ほのかに会いにいくんだから！いくわよ！」
そう言つて、ブラックは再びリベリオン達に立ち向かっていく。
その様子を見ていたパイレーツも、うつすらと笑った。

パイレーツ「勝負あつたわね……」
パイレーツの言う通り、ブラックは先程までよりも有利に戦いを進めていた。

5人のプリキュアを相手にしているにも関わらず、ほとんど一方的に攻め続けている。

ブラック「はあああああつ！！」

ブラックはダークルージュとダークアクアを吹っ飛ばすと、続けて現れたリベリオンに連続でパンチを放つていき、徐々に後退させていく。

リベリオンも鎌で反撃するが、ブラックは素早くかわすと同時にリベリオンの腹にキックを放ち、彼女を吹っ飛ばすことに成功した。

すると、今度はダークレモネードとダークミントが共に背後からブラックに襲い掛かってきた。

しかしブラックは全く動じることなく右足にエネルギーを蓄め始める。

ブラック「プリキュア……ブラックキック！！」

ダークレモネードとダークミントがブラックに攻撃を仕掛けようとしたその瞬間、ブラックは振り向きざまに必殺キックを放つて2人を吹っ飛ばした。

そして、ダークレモネードとダークミントは地面に倒れ、体を光らせた後消滅した。

ブラック「なるほど……これで倒したことになるのね……」

そこへ、ダークルージュが炎を放つて攻撃してきた。

ブラック「っ……！」

攻撃を受けてブラックは一瞬怯むも、すぐに体勢を整え右腕にエネルギーを蓄め始めた。

ブラック「決めるわよ……！！」

ブラックは右腕にエネルギーが蓄まったの確認するとダークルージュに向かって走りだし、同時にダークルージュも同様に左腕を構えると、ブラックとほぼ同じタイミングで走りだした。

ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

そして、2人は相手の目の前でくると、同時に相手の顔面めがけてパンチを放った。

その結果、ブラックのパンチはダークルージュのパンチよりも先に相手の顔に命中し、負けたダークルージュは勢いよく吹っ飛びながら光となって消滅した。

ダークルージュをも倒したブラックは、続いてダークアクアとリベリオンに立ち向かっていった。

それに対してダークアクアは剣を、リベリオンは鎌を持ってブラックを攻撃する。

ブラック「くっ・・・！」

2人の猛攻の前に、武器を持たないブラックは次第に追い詰められていく。

しかし、ブラックは諦めない。

何度剣で体を切り付けられても、何度鎌で衣装を切り裂かれても、ブラックはその度に立ち上がった。

ほのかに会いたい、ほのかを守りたい、その思いがブラックを戦わせているのだ。

ブラック「絶対負けない！ほのかの為に・・・絶対に！」

ブラックはそう言って立ち上がると、両腕にエネルギーを蓄め始めた。

それと同時にダークアクアは剣を振り上げ、ブラックに襲い掛かる。ブラック「待っててね、ほのか・・・プリキュア！」

ブラックは右腕に力を込めながら高く飛び上がった。

ブラック「ブラックグレネイド！」

技名を叫ぶと同時にブラックはダークアクアめがけて勢いよく急降下した。

ブラック「はあああっ！！」

それを見たダークアクアは剣で防御体制に入るが、ブラックの勢いは止まらなかった。

ブラックは左手で勢いよくパンチを放ち、それを防ごうとしたダークアクアの剣を破壊するのに成功した。

そして、怯むダークアクアにすかさず右手でもう一発パンチを放ち、大きく吹っ飛ばした。

ダークアクアは光となって消滅した。

ブラック「よし、残るは……」

ブラックの目の前には、リベリオンが鎌を構えて立っていた。

ブラック「いくわよ……悪のプリキュアさん……」

その言葉と同時に、リベリオンは鎌を振り回してブラックに襲い掛かってきたが、ブラックはその攻撃をことごとくかわしてリベリオンを翻弄していった。

そして、リベリオンが鎌を大きく振り上げると同時に素早く後退した。

リベリオンは勢いよく鎌を振り下ろすが、ブラックによってかわされた鎌はそのまま地面に深く突き刺さった。

これを狙っていたブラックは、鎌が地面に刺さった瞬間に高くジャンプした。

そして、空中で両足にエネルギーを蓄めるとリベリオンに向けてとどめの一撃を放った。

ブラック「プリキュア！ブラックエクストリーム！」

ブラックの渾身の一撃がリベリオンに命中し、リベリオンは吹っ飛ばされながら光となって消滅した。

5人全員に勝利したブラックは、パイレーツの方を向いて対峙した。ブラック「パイレーツ、今の見てたかしら！？最後の試練、クリアしてみせたわよ！」

その言葉を聞いてパイレーツはしばらく黙っていたが、やがて彼女はうっすらと笑った。

パイレーツ「……まだまだ甘いわね……………」

ブラック「えっ？」

ブラックにはパイレーツの言った意味が全くわからなかった。

するとその時、どこからともなく二つの光のリングが飛んできてブラックを襲った。

ブラック「っ……………!!」

間一髪攻撃を避けたブラックがリングの飛んできた方を見ると、そこにはメロディとリズムがベルティエを持って立っていた。

ブラック「貴方達は……………」

目の前の相手にブラックが驚愕していると、背後から二つの人影が姿を現した。

誰かと思い振り向くと、そこにいたのはビーチとブロッサムだった。そして更にブラックが周囲をよく見ると、ブルーム、イーグレット、ローズ、パイン、ムーンライトも次々とブラックの前に姿を現し、気が付くとブラックは、メロディをはじめ9人のプリキュアに囲まれていた。

ブラック「みんな……………どういうこと!？」

パイレーツ「最後の試練はまだ終わってないってことよ。」

ブラック「!？」

パイレーツ「ふふ……………次はこの子達が相手よ。さあ、貴方の力を証明してみせなさい。」

そう言つて、パイレーツはその場を立ち去っていった。

ブラック「そんなこと言つたつて……………みんなと戦うなんて出来ない……………」

共に戦ってきた仲間達が敵という状況にブラックは戸惑うが、そんな彼女にメロディ達が一斉に襲い掛かる。

ブラック「っ……………!!」

ブラックは素早く身構えるが、やはりどうしても戦うことが出来ない。

しかし、メロディ達は全く躊躇することなくブラックを攻撃する。

ただでさえリベリオン達との戦いで体力を消耗しているブラックは満足に反撃出来るはずもなく、どんどん体を傷つけられていった。そして、ブルームとイーグレットの必殺技を受けてブラックは大きく吹っ飛ばされ、そのまま地面に倒れこんだ。

ブラック「くっ・・・やっどこまできたのに・・・」

悔しがるブラックにとどめを刺そうと、メロディとリズムがベルテイエを構えた。

その時、

ルージユ「まったく・・・みんながブラックを襲ってるのは見ていて気分が悪いわね・・・」

暗闇の中からドリーム達が姿を見せた。

レモネード「こんなところで会うなんて奇遇ですね。」

ブラック「どうして・・・ここに？」

マリ「別に？あかし達、ちよつとこの世界を散歩してただけだよ？」

ベリ「そしたら、聞き覚えのある声が出たから来てみれば・・・」

・・・

サンシャイン「まさかプロツサム達が敵だなんてね・・・」

ルージユ「どうせもつすぐでこの世界ともお別れだし、ちよつとウ

オーミングアップがてら相手してやらない？」

レモネード「賛成です！」

アクア「ええ。」

ドリーム「ブラック、私達のこととは心配しなくていいからね。」

マリ「ここはあかし達にまかせて、ブラックはパイレーツのところにでも行ってくれば？」

ブラック「みんな・・・ありがとう・・・」

ブラックは傷ついた体を支えながら立ち上がり、ドリーム達を残してパイレーツの向かった方向へと走っていった。

それを見届けたドリーム達は、メロディ達と対峙する。

ベリ「・・・ブラックにはああ言っちゃったけど・・・」

ミント「やっぱり、ローズやみんなと戦わなきゃいけないのは……」

ルージュ「正直きついわね……」

サンシャイン「でも、私達がやらなきゃ。」

アクア「そうね。これだけが私達がブラックにしてやれることなんだから。」

パッション「精一杯頑張りましょう。」

ドリーム「うん！みんな、準備はいい！？」

マリ「もっちゃん！」

レモネード「いつでもオツケーです！」

ドリーム「それじゃ……」

ドリーム達は一斉に名乗りをあげた。

マリ「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

ベリー「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ！キュアベリー！」

パッション「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キュアパッション！」

プリキュア5「……希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく五つの心！Yes！プリキュア5！」

ドリーム「みんな！いくよ！」

ドリーム達は各自武器を持って走りだし、メロディ達も一斉にドリーム達に向かって走り出した。

第8話「最後の試練」(後書き)

次回、怒濤のプリキュアバトル！

ちなみにブラックの新技はどちらも仮面ライダーWをモデルにします。

第9話「激突！プリキュアVSプリキュア！」（前書き）

今回、オリジナル技連発です。

あと、結構容赦なくプリキュア同士を戦わせてるのでもしかしたら注意が必要かもしれません。

第9話「激突！プリキュアVSプリキュア！」

ブラック「・・・パイレーツ・・・」

ドリーム達の助けを得てパイレーツの元へとたどり着いたブラックは、そこで彼女と対峙していた。

パイレーツ「・・・」

ブラックがやって来てからパイレーツはしばらくの間沈黙を続けていたが、やがて小さくつぶやいた。

パイレーツ「・・・いい仲間を持ったわね。」

ブラック「えっ・・・？」

パイレーツ「・・・さ、これが本当に最後の試練よ。」

そう言っただけパイレーツは、カトラスを取り出して構えた。

パイレーツ「・・・私に勝ってみせなさい。」

ブラック「・・・なるほどね・・・いいわ、望むところよ。」

そして、ブラックとパイレーツは互いに睨み合い、直後に相手に向かって走り出した。

その頃ドリーム達は、パイレーツによって召喚されたメロディ達と激しい戦闘を繰り返していた。

ドリーム「はあっ！」

ドリームはフルールでメロディ何度も切り掛かるが、メロディもベルティエでフルールを受け止め、ドリームにキックを放って応戦する。

ドリーム「っ・・・！」

怯むドリームに、メロディがミュージッククロンドを放った。

サンシャイン「ドリーム！」

そこへサンシャインが割り込み、サンフラワーイージスを張ってドリームを守った。

ドリーム「サンシャイン！」

サンシャイン「大丈夫？」

ドリーム「うん、平気。」

サンシャイン「じゃあ、いくよ！」

2人の前には、メロディとピーチが立ちはだかっていた。

ドリーム「オツケー！」

仲間と戦うということに若干の罪悪感を覚えながらも、2人は武器を持って立ち向かっていった。

ルージュ、ミント「うあああああっ！！！」

その一方で、ルージュとミントはブルームとイーグレットのコンビネーションに苦戦していた。

ルージュ「くっ、思ったよりやるじゃない・・・」

そう言っただけ立ち上がるルージュに、ブルームが襲い掛かってきた。

その素早さに、さすがのルージュも攻撃を防ぐのが精一杯だ。

ミント「ルージュ・・・！」

ミントは助けにいかうとするが、そこへ「貴方の相手は私よ」と言わんばかりにイーグレットが立ちはだかった。

ミント「イーグレット・・・」

戸惑うミントに、イーグレットが容赦なく襲い掛かる。

ミント「っ・・・やっぱりみんなと戦うのは辛い・・・でも・・・」

ルージュ「ああああっ！！」

その瞬間、ブルームの攻撃で吹っ飛ばされたルージュがミントに激突した。

ミント「きゃあっ！」

そのまま2人は地面に倒れこんだ。

ルージュ「くっ・・・ミント、ごめん・・・」

ミント「私は大丈夫よ・・・それより、早くなんとかしないと・・・」

2人は体を支え合いながら立ち上がるが、そこへブルームとイーグレットが2人めがけてツインストリーム・スプラッシュを放ってきて

た。

ルージュ「……！」

一方、パッションとレモネードもブロッサムとリズムに厳しい戦いを強いられていた。

パッション「強い……これが、プリキュアキーの力……」
ブロッサムの攻撃をかわしながら、パッションは改めてプリキュアの力を感じていた。

そんな彼女に、ブロッサムはブロッサムシャワーを放った。
パッション「はっ！」

素早くかわすパッションだったが、次の瞬間ブロッサムの技はパッションの後ろにいたレモネードを襲った。

レモネード「きゃあああ！」

パッション「しまった！」すぐにパッションが駆け寄るが、そこへリズムがミュージッククロンドを放って2人を攻撃してきた。

パッション、レモネード「きゃああああつ！！！」

リズムの攻撃を受けて2人は倒れた。

パッション「くっ……」

レモネード「ブロッサムもリズムも、私達がわからないんでしょうか……？」

パッション「多分無駄ね。どうやらこの子達はパイレーツの支配化にあるみたいだし、言葉を話さないことから見ても自分達の意志は持ってないと見てよさそうよ。」

するとそこへ再びブロッサムが襲い掛かってきた。

パッション「とにかく、今はなんとかしてこの場をしのがないと……！」

そう言っただけパッションは、再びブロッサムに立ち向かっていく。

そこへリズムが現れ、パッションに向けて必殺技を放とうと構えるがレモネードの妨害で失敗に終わった。

レモネード「貴方の相手は私がします！」

そう言っただけレモネードはリズムに立ち向かっていくが、リズムは再

び標的をレモネードに変えると、ベルティエをクロスロッドに持ちかえ、ファンタステイックピアチエーレを放った。

アクア「はあっ!」

ベリー「はっ!」

マリ「たああ!」

アクア、ベリー、マリもそれぞれローズ、パイン、ムーンライトと激しい戦いを繰り広げていた。

やはり3人共初めは仲間と戦うことに迷っていたが、自分達が今すべきことを思い出した彼女達はなんとか迷いを振り切り、それぞれの戦いに挑んでいる。

マリ「っ!」

ムーンライトがムーンタクトでマリに襲い掛かるが、マリは素早くマリインタクトを取り出して受け止めた。

マリ「やるわね・・・でも本物のゆりさんはもつと強いんだから!」

そう言って、マリはムーンライトにキックを放って後退させた。

ベリー「マリもなかなかやるじゃない。」

アクア「私達もいくわよ。」

ベリー「はい!」

アクアとベリーは、共にローズとパインに向かって走りだし、2人の目の前まで来ると同時に勢いよくキックを放った。

アクア、ベリー「ダブルキック!」

2人のキックを受け、ローズとパインは大きく吹っ飛ばされた。

サンシャイン「はっ!」

ピーチロッドで攻撃してくるピーチに対し、サンシャインはシャイニータンバリンで攻撃を防ぎながらピーチにキックを放って応戦していた。

その隣では、ドリームとメロディが戦っている。

ドリーム「はあっ!」

メロディの攻撃をかわしながらドリームはフルーレで反撃しようとするが、メロディの攻撃の前になかなか思う様に戦えないでいた。

そして、メロディはドリームと少し距離を置くとベルティエをクロスロッドに持ちかえ、ミラクルハートアルペジオをドリームめがけて放った。

ドリーム「っ……うあああっ！」

サンシャイン「ドリーム！」

攻撃を受けて吹っ飛ばされるドリームの元へサンシャインが駆け付けようとするが、すかさずピーチがラブサンシャイン・フレッシュを放ってサンシャインを襲った。

サンシャイン「うああああ！」

2人は攻撃を受けて吹っ飛ばされ、地面に激突した。

そこへ更に攻撃を仕掛けようと、メロディとピーチが迫る。

サンシャイン「強い……このままじゃ、やられる……」

仲間達の攻撃を受け続けてその強さを実感したサンシャインは、弱気になりかけていた。

しかし、ドリームは傷ついた体をおさえながら立ち上がると、そんなサンシャインを励ますかの様に言った。

ドリーム「大丈夫……心配しなくても、あの子達は私達には勝てないよ……」

サンシャイン「……ドリーム？」

ドリーム「どんなに強かったって、所詮は偽物。本物のみんなに比べれば、全然大したことないよ。」

サンシャイン「……！」

その言葉を聞いたサンシャインは、不意に笑みを浮かべながら立ち上がった。

サンシャイン「……そうだったね……今私達が戦ってるのは、みんなによく似た偽物……いくら姿や能力がそっくりでも、本物には遠く及ばない……！」

ドリーム「うん！」

同じ頃、他のプリキュア達も目の前の敵に言い放っていた。

アクア「自分の意志を持たず、ただ命令に従って動いてるだけの貴

方達が、私達に勝てるはずないわ！」

ベリー「それに、貴方達には『心』が無い！」

マリリン「そうだよ！どんなに力があつたつて、心が無きゃ意味ないじゃん！」

パッション「心を持っていない時点で、貴方達は既に私達に大きく劣ってる！」

レモネード「そんな貴方達がいくら力を合わせたつて、私達の力には勝てません！」

ルージユ「とつととあんた達を倒して、本物のみんなに再会してやるわよ！」

その瞬間、ブルームとイーグレットが再びルージユとミントに襲い掛かる。

ルージユ「ミント！」

ミント「ええ！」

2人は素早く跳躍すると、

ルージユ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

ミント「プリキュア！エメラルドソーサー！」

ルージユは無数の炎の球を、ミントは緑のエネルギー弾を放ち、ブルームとイーグレットの動きを食い止めた。

ルージユ、ミント「はっ！！！」

2人が怯んだ隙をつき、ルージユはファイヤーフルレを、ミントはプロテクトフルレを取り出して素早く2人に切り掛かる。

ルージユ「はああ！」

ミント「はあっ！」

2人は素早い動きでブルームとイーグレットを二三回程切り付け、やがて攻撃を止めた。

同時にブルームとイーグレットは体を光らせながら地面に倒れ、消滅した。

ルージユ「よし！」

ミント「まずは一丁あがりね。」

2人はその場で腕をぶつけ合うと、互いに笑みを浮かべた。

レモネード「プリキュア！リズムチェーン！」

その頃、レモネードは光の鎖を飛ばしてリズムを拘束していた。

リズムは拘束から逃れようと抵抗するが、レモネードはそれに負けないくらい力を込め、リズムを食い止める。

レモネード「パッション！」

リズムと力勝負を続けながら、レモネードはパッションに呼び掛けた。

パッション「っ・・・わかったわ！」

ブロッサムと一進一退の攻防を続けていたパッションは、素早くブロッサムにキックを放って後退させ、その隙に動けないリズムに向かって勢いよく飛び掛かる。

パッション「はあっ！」

パッションが飛び掛かってきた瞬間、レモネードはリズムの拘束を解き、パッションはそのままリズムを力強く蹴飛ばした。

リズムが吹っ飛ばされたと同時に、今度はブロッサムが2人に襲い掛かる。

パッション「プリキュア！ハピネスハリケーン！」

しかしパッションはすかさず必殺技を放ち、ブロッサムを大きく吹っ飛ばした。

パッション「今よ！レモネード！」

レモネード「はい！」

レモネードはシャイニングフルールを取り出し、リズムに向かっていく。

レモネード「はあああ！」

ゆっくりと立ち上がるリズムを、レモネードは一撃、また一撃と切り付けていき、リズムはそのまま光りながら倒れて消滅した。

レモネード「はああ！」

リズムに勝利したレモネードは、そのままパッションに加勢しようとブロッサムに立ち向かっていった。

アクア「ベリー！マリリン！いくわよ！」

また同じ頃、アクア、ベリー、マリリンの戦いにも決着が着こうとしていた。

3人はそれぞれの対戦相手を後退させると一ヶ所に集まり、アクアは腕を交差し、ベリーとマリリンはベリーソードとマリインタクトといった専用武器を取り出して一斉に必殺技を放った。

アクア「プリキュア！サファイアアロー！」

ベリー「プリキュア！エスポワールシャワー・・・フレイッシュユ！」

マリリン「プリキュア！ブルーフォルテウェイブ！」

3人の放った技は一つに合体して巨大なエネルギー弾となり、ムーンライト達に向かって飛んでいく。

ムーンライトとパインは素早くジャンプしてかわしたがローズだけはかわしきれず、そのまま技を受けて消滅した。

ローズが消滅すると同時にパインがアクアに襲い掛かるが、アクアは全く動じることなくトルネードフルールを取り出して構える。

アクア「はああっ！」

パインの攻撃をかわしながら、フルールで彼女を勢いよく切り付ける。

そして、更に力を込めてもう一撃切り付け、パインは体を光らせた後消滅した。

そのままアクアは休むことなくベリー、マリリンと共にムーンライトに立ち向かっていく。

サンシャイン「プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

ドリーム、サンシャインとメロディ、ピーチの戦いも佳境に入っていた。

サンシャインはゴールドフォルテバーストを発動させて巨大な光のゲートを作り出した。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

そこへ全身に光を纏ったドリームが突撃してきたかと思うと、サン

シャインが作り出した光のゲートをくぐった瞬間ドリームの体が金色に輝やき、ドリームはその勢いのままピーチに突っ込んでいく。ピーチはラブサンシャイン・フレッシュをドリームめがけて放つが、すぐに打ち消されてしまった。

ドリーム「はあああああ！」

ピーチはドリームの突撃を受け、光となって消滅した。

そしてドリームはクリスタルフルールを取り出してサンシャインと共にメロディに立ち向かう。

メロディはベルティエを一つに合体させてドリームにミュージックロンドを放つも、サンシャインがすかさずバリアを張って防ぎ、その隙にドリームはフルールでメロディに切り掛かる。

フルールの一撃で怯むメロディに、ドリームは力強くキックを放って吹っ飛ばした。

ムーンライトとプロツサムも同じ様に吹っ飛ばされ、3人は一ヶ所に集まった。

ドリーム「みんな！とどめよ！」

ルージュ、レモネード、ミント、アクア「Yes!!」「」

プリキュア5はそれぞれフルールを持ち、立ち上がるメロディ達に向かつて構えた。

プリキュア5「はあああああ……!!」「」

ドリーム「プリキュア！ファイブ・スラッシュ！」

ドリームの掛け声と同時に、プリキュア5はフルールから光の刃をメロディ達に向けて放った。

技を受けたメロディ、プロツサム、ムーンライトは体を光らせた後消滅した。

ドリーム「……」

全員に勝利したドリーム達はしばらく沈黙し続けていたが、

一同「……やったあああ!!」「」

やがて全員が一斉に喜びの声をあげた。

ドリーム「やったね！みんな！」

ミント「ええ。私達、自分達のすべきことを成し遂げられたのね。」
ルージュ「さすがにちよつとしんどかったけどね・・・」

ベリー「とにかくこれで、ブラックの役に立てたわけよね・・・」
するとその時、全員の体が一斉に輝き始めた。

パッション「・・・！これは・・・！！」

サンシャイン「・・・多分、もうこの世界とはお別れなんだと思う。」

レモネード「そんな！まだブラックが・・・！」

アクア「・・・うん、その必要はないわ。」

マリ「アクア？」

アクア「私達が心配しなくても、あの子はきつと試練を乗り越えて帰ってくるわ。」

ドリーム「でも・・・」

アクア「あの子を信じる。それもまた、私達が今してあげられることじゃないの？」

ベリー「・・・そうですね。」

レモネード「後はなぎささんが終わらせるべきことですもんね。」

マリ「じゃ、あたし達は一足お先に・・・」

ドリーム「うん！」

その瞬間、ドリーム達は死後の世界から姿を消した。

第9話「激突！プリキュアVSプリキュア！」（後書き）

次回、決着！

第10話「終わる試練」

パイレーツ「はあっ！」

ブラック「っ！」

パイレーツはカトラスで何度もブラックに切り掛かるが、ブラックはことごとく攻撃をかわしていく。

パイレーツ「…なかなか成長してるじゃない。」

ブラック「当然でしょ、いつまでもなめてもらっちゃ困るわ！」

ブラックは素早く回し蹴りを放つも、パイレーツは左腕で攻撃を受け止め、プリキュアキーを取り出した。

パイレーツ「それでこそ私が見込んだ戦士ね。プリキュアチェンジ
！」

「キュア、ウイング！」

キュアウイングにチェンジしたパイレーツは、銃型の武器ウイングショットをブラックの目の前に突き付ける。

Pウイング「さあ、どうするの？」

ブラック「っ………だったらこうしてやるわ！」

そう言うとブラックは素早い動きでパイレーツの左手を掴み、次の瞬間思い切り投げ飛ばした。

「2・2・4」

しかし、ウイングは右腕のウイングブレスに番号を入力して背中に光の翼を出現させ、優雅に上空を飛翔する。

Pウイング「はっ！」

そして、上空からブラックめがけて銃を乱射してきた。

弾丸の雨が次々とブラックを襲う。

ブラック「くっ………このままじゃまずい……！」

ブラックはなんとか攻撃から抜け出すと、両腕に力を込めながら高く跳躍した。

Pウイング「……！」

ブラック「プリキュア！ブラックグレネイド！」

ウイングが怯んだ隙について、左手で力強くパンチを放つ。

勿論ウイングも咄嗟に受け止めるが、次の瞬間ブラックは右手で更に力を込めたパンチを放った。

これにはさすがのウイングも耐えきれず、そのまま地上に落下した。パイレーツ「くっ・・・！」

変身が解けながらも立ち上がるパイレーツに、更にブラックが仕掛ける。

ブラック「はああああ！」

パイレーツ「っ！」

予想以上に素早いブラックのスピードに、パイレーツが次第に押されていく。

パイレーツ「まさかここまで成長してるなんて・・・でも、私だって簡単に負けてられないのよ！」

パイレーツはブラックの攻撃を素早く受け止めると、彼女の腹にパンチを放って後退させ、直後にプリキュアキーを差し込んだ。

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

『キュア、コズミック！』

Pコズミック「勝負よ！」

ブラック「いいわ、受けてやるうじゃない。」

コズミックとブラックは互いに腕にエネルギーを込めながら相手に向かって走っていく。

ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

Pコズミック「プリキュア！コズモブレイカー！」

二人の拳が勢いよくぶつかりると同時に膨大な衝撃が発生し、その勢いで二人は大きく吹っ飛ばされた。

コズミックはパイレーツへと変身が解ける。

パイレーツ「くっ・・・！」

パイレーツをよそに、ブラックは再び立ち上がった。

ブラック「はあ・・・はあ・・・さて、そろそろ終わりにしましょう！」

そうやってブラックは必殺技の体勢に入る。

パイレーツ「ふう……本当に驚いたわ。こんなに強くなってるなんてね。」

パイレーツはカトラスとプリキュアチップを取り出して立ち上がった。

パイレーツ「それじゃあ私ももつと本気にならないとね！」

そう言うと、パイレーツはチップをカトラスに差し込んだ。

するとその瞬間、パイレーツの背後に無数の浮遊砲台が出現し、その全てがブラックに照準を合わせていた。

ブラック「なっ……！」

パイレーツ「プリキュア！パイレーツブラスト！」

掛け声と共に砲台からいくつもの鉄球が発射され、一斉にブラックを攻撃する。

ブラックの周囲に次々と鉄球が命中し、同時に何度も爆発が起こる。しかしパイレーツは更に鉄球を発射してブラックを攻撃し続け、遂に煙でブラックの姿が見えなくなったところでパイレーツは攻撃を止めた。

パイレーツ「はあ……はあ……」

少しやりすぎたかと思いつつも、様子を見ようと正面を見た。

が、そこにブラックの姿はなかった。

パイレーツ「……？」

どこに行っただかと思いつつも、周囲を見回すと、上空から彼女の声を聞いた。

ブラック「ここよ！」

パイレーツが急いで上を見上げると、ブラックが右足にエネルギーを込めた状態で跳躍していた。

パイレーツ「な……！」

ブラック「これで決める！プリキュア！ブラックキック……」

驚くパイレーツに、ブラックは必殺のキックを放った。

パイレーツ「……ここはキュアパッションの瞬間移動能力で……」

」

そう思い、パイレーツがプリキュアキーを差し込もうとしたその時
ブラック「・・・と見せかけてパンチ！」

ブラックは突然体を回転させて体勢を変え、勢いよくパンチを放つ
た。

パイレーツ「なっ・・・・・・・・うああっ！」

突然のブラックの行動に怯んだパイレーツは、攻撃を防ぐ暇もなく
必殺技を受けて大きく後退した。

同時にブラックも地上に着地する。

ブラック「とどめよ！プリキュア！ブラックエクストリーム！」

パイレーツ「っ・・・・・・・・ああああああっ！！！」

両足に力を込めたブラックの渾身のキックが直撃し、パイレーツは
大きく吹っ飛ばされた。

ブラック「・・・・・・・・」

パイレーツ「・・・・・・・・」

それでもまだ立ち上がるパイレーツを見て、ブラックもさすがに焦
りを見せる。

ブラック「これでもまだ駄目だなんて・・・・・・・・だった次は・・・・！」

そう言つてブラックが再び必殺技の構えに入ったその時、パイレー

ツは突然変身を解いて湊の姿へと戻った。

ブラック「え・・・・・・・・？」

突然の行動にブラックが戸惑っていると、湊がゆっくりとブラック
に近づいてきた。

湊「・・・・・・・・」

ブラック「・・・・・・・・」

二人はしばらくの間互いに沈黙し合っていたが、やがて湊がブラッ
クの手を握りながら口を開いた。

ブラック「・・・・・・・・？」

湊「これ以上やる必要はないわ・・・・・・・・私の負けよ。」
ブラック「え・・・・・・・・ってことは・・・・・・・・」

湊「ええ。最後の試練、合格よ。おめでとう。」

ブラック「・・・あ・・・ああ・・・」

その言葉を聞いたブラックは、嬉しさのあまり泣きたい気持ちを抑えながら湊に抱きついた。

ブラック「私・・・本当に勝ったの・・・？」

湊「本当よ。」

ブラック「そつか・・・」

湊は、そっとブラックを体から離れた。

湊「さ、のんびりしてる暇は無いわ。早く元の世界に戻るのよ。」

ブラック「あ・・・」

気が付くと、ブラックの体が徐々に光り始めていた。

湊「・・・最初はどうなることかと思っただけど、やっぱり貴方は私の思った通り・・・ううん、それ以上に凄い奴だったわ。」

ブラック「あの・・・」

湊「ん？」

ブラック「・・・ごめんなさい。貴方の気持ちも知らずに、酷いこと言ってしまった・・・本当にごめんなさい。」

そう言っつて、ブラックは頭を下げた。

湊「・・・貴方が大事なことを思い出してくれたからもういいのよ。それよりも、貴方が一番謝らなきゃいけない人がいるんじゃないの？」

ブラック「あ・・・」

湊「ふふ・・・」

湊はかすかに笑みを浮かべると、体が消えつつあるブラックに一枚の紙切れを渡した。

ブラック「これは・・・？」

パイレーツ「困った時はいつでもこの場所に来なさい。また鍛えてあげるわ。」

ブラック「・・・ありがとう、パイレーツ・・・ううん、湊・・・」

湊「・・・貴方には、やるべきことはまだ残ってるでしょ。お礼を言

うのはその後でいいわよ。」

ブラック「湊……うん、わかった。」

ブラックの体は完全に消えようとしていた。

ブラック「また……会えるよね？」

湊「当然でしょ。」

ブラック「……それじゃあ、またね……」

そして、ブラックは姿を消し、後には湊だけが残された。

湊「……頑張るのよ……なぎさ……」

そう言っつて、湊は一人暗闇の中へと消えていった。

第10話「終わる試練」(後書き)

次回、遂に二人が再開！

全然プリキュアに関係ない話ですが、仮面ライダーフォーゼ、かっこいいですよね？ね！？

第11話「再会の時」(前書き)

忙しくてなかなか更新出来ませんが、頑張ります。

第11話「再会の時」

ブラック「……ん……ここは……」
ブラックは目を覚ました。

目の前には先程までいた死後の世界ではなく、ブラックが本来いるべき現実世界が広がっていた。

ブラック「本当に……生き返ってる……」
すると、階段からドリーム達が姿を現した。

ドリーム「ブラック！」

ブラック「ドリーム！それにみんなも！」

ブラックは立ち上がるとすぐにドリーム達の元へ駆け寄った。

ブラック「みんなも生き返ってたの!？」

ドリーム「うん！」

レモネード「ブラックも、無事に試練をクリアしたみたいですね。」

ブラック「うん、一応ね。」

ベリー「ところで、パイレーツは？」

ミント「そういえば……どこに行っちゃったの？」

ブラック「わかんない………だけど、きっとまた会える……

そんな気がする。」

かれん「……そうね………」

ブラック「……さ、行こう。みんなが待ってるよ。」

パッション「ええ。」

ルージュ「さあて、コンカライドに今までのお礼をたっぷりしてあげなきゃね！」

えりか「あたしを殺したことを後悔させてやるんだから！」

サンシャイン「ちよっ……二人共落ち着いて。」

ブラック「ふう……みんな、いくよ！」

そして、ブラック達は塔の最上階へと急いだ。

その頃最上階では、

ホワイト「きゃあああああ！」

コンカロード「ふん！」

ホワイト達がコンカロードの力の前に追い詰められていた。

コンカロード「さあ、そいつを渡してもらおうか。」

コンカロードは自分から光のエネルギーを奪ったブロッサムに迫る。

ブロッサム「い・嫌です！絶対に渡しません！」

ブロッサムはコンカロードから逃れようとするも、遂に追い詰められる。

ブロッサムはそこへ誰よりも先に到着した。

ブロッサム「……！ブロッサム！みんな！」

目の前で危機に陥っているブロッサム達を前にして、再び焦るブロッサム。

するとその時、パイレーツの声が脳裏をかすめた。

パイレーツ「何を迷ってるの、今貴方がやるべき事は一つしかないはずでしょ。貴方が戦う理由をもう一度思い出してみなさい。」

ブロッサム「パイレーツ……！」

気が付くと、コンカロードはブロッサムの目の前まで迫っていた。

ブロッサム「……そうだった……私は、ほのかやみんなを守る！私の手で守ってみせる！」

コンカロード「死ねえ！」

ブロッサム「……！」

コンカロードは、ブロッサムめがけて剣を振り上げた。

ブロッサム「みんなを……これ以上傷つけさせやしない！」

それと同時に、ブロッサムは素早く駆け出した。

ブロッサム「プリキュア！ブロッサムキック！」

そして、コンカロードめがけて勢いよくキックを放った。

コンカロード「!?」

次の瞬間、コンカロードはブロッサムのキックを受けてその場から後

退した。

コンカロード「ぬおっ・・・！」

ブラックはブロッサム目の前に着地する。

ブロッサム「え・・・？」

初めて目の前の人物が誰か認識したブロッサム達は、コンカロードを含め全員驚愕した。

ルミナス「あ・・・ああ・・・」

ホワイト「・・・なぎさ・・・」

コンカロード「くっ・・・何故貴様がここに・・・！」

するとブラックは、素早くコンカロードに接近すると同時にパンチを放ってコンカロードを後退させた。

コンカロード「ぐおっ！」

ブラック「いくわよ！」

ブラックは、自慢の攻撃でコンカロードをどんどん追い詰めていく。ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

コンカロード「うおお！」

そして、必殺のパンチでコンカロードを大きく吹っ飛ばした。

ピーチ「す・・・凄い・・・」

ブラック「・・・」

コンカロードを退けたブラックは、ホワイトの目の前にやって来た。そして、何も言わずにそっと右手を差し伸べた。

ホワイト「なぎさ・・・」

ブラックの手を握り締めながら立ち上がるホワイト。

それを見たブラックは優しい笑みを浮かべながら言った。

ブラック「ただいま、ほのか。」

その言葉で、ホワイトの涙腺が大きく緩んだ。

ホワイト「な・・・なぎさあああ！」

ブラックに抱きつきながら号泣するホワイトを、ブラックは優しく抱き締める。

ブラック「（ほのか・・・やっと会えた・・・私の・・・）」

ホワイト「なぎさ・・・どこ行ってたのよ・・・」

ブラック「・・・ごめんね・・・」

ブラックは、自分が今一番謝るべき人に謝った。

ブラック「・・・でも、もう大丈夫。またこれからもずっと一緒よ。」

ホワイト「ええ・・・」

ホワイトは泣きながらも笑顔で返した。

そこへドリーム達も到着し、同時にルミナス達も次々と立ち上がる。かれんとえりかも変身能力を取り戻し、最早状況は彼女達が圧倒的に有利となっていた。

勿論、プリキュア達がこの後コンカロードに大勝利を収めたのは言うまでもない。

そして・・・

ひかり「・・・」

アカネ「・・・おかえり。」

TAKO CAFEに帰って来たひかりを、アカネは笑顔で迎えた。アカネ「あらあら、またそんなに傷だらけになって・・・早く来なさい、手当てするから。」

ひかり「・・・はい。」

アカネ「そういえば、あの二人は一緒じゃないの?」

その頃、その二人は。

ほのか「どうしたの?またここに来るなんて。」

なぎさとほのかは、戦いの日の前日に仲間達と約束を交わした草原に二人きりで訪れていた。

なぎさ「・・・」

ほのか「なぎさ・・・?」

なぎさ「・・・ほのか・・・」

するとその瞬間、なぎさはいきなりほのかに抱きついた。

ほのか「え……？」

なぎさ「ほのか……ごめんね……本当にごめんね……私が弱かったばかりに……」

なぎさは涙をこらえながら悲しそうな声でほのかに話し続ける。

なぎさ「夢を見たの……それで……その夢を見て、もう二度とほのかに会えなくなるんじゃないかって凄く不安になって……私……もう絶対ほのかと離れたくない……」

ほのか「なぎさ……」

なぎさの想いを知ったほのかはそつとなぎさの体を離れた。

ほのか「なぎさがそんな辛い想いをしてたなんて、知らなかった……」

なぎさ「ねえ、ほのか……私達、これからもずっと一緒だよね……？」

ほのかは優しい笑顔で答えた。

ほのか「勿論よ。第一、さっきなぎさが言ってくれたことじゃない。」

なぎさ「ほのか……」

その言葉を聞いて、なぎさに笑顔が戻った。

なぎさ「……うん、そうだったね……」

ほのか「約束よ。私達はこれから何があっても絶対一緒。二度と離ればなれにはならないって。」

なぎさ「……うん、絶対約束する。」

二人は指切りをしながら、互いに笑顔で相手を見つめ合った。

なぎさ「ほのか。」

ほのか「なぎさ。」

「ずっと一緒だよ。」

しかし、この時の彼女達には知る由もなかった。

・
・
・
・
後に、再び二人が離ればなれになる時がやって来るといふことを

第11話「再会の時」(後書き)

これにてコンカロード編は終了となります。

次回からはこちらでもルーイン帝国編を開始する予定です。

番外編「Happy Birthday なぎさ」(前書き)

間に合ったー!!

番外編「Happy Birthday なぎさ」

ほか「せーの・・・」

一同「・・・なぎさ(さん)、お誕生日おめでとう!!!」「」
全員、なぎさに祝いの拍手を送る。

なぎさ「あはは・・・なんか照れるよ・・・」

恥ずかしそうにはにかみながら、なぎさは蝋燭の火を吹き消した。
ほか「なぎさ、おめでとう。」

ひかり「おめでとугоざいます。」

他のメンバーも、次々と祝いの言葉を述べていく。

なぎさ「みんな・・・ありがとう、私なんかの為にパーティーまで
開いてくれて・・・」

くるみ「何言ってるのよ、当然のことじゃない。」

こまち「ええ。それに、お礼を言いたいのは私達の方よ。」

なぎさ「え?」

ラブ「うん。だってなぎささんは、いつも私達に力と元気をくれる
大事な人です。」

響「前に私達が諦めかけた時も、凄く励ましてくれたじゃないです
か。」

咲「なぎささんが頑張ってくれたからこそ、私達も同じ様に頑張れ
るんです。それがなかったら、今の私達は存在してません。」

つぼみ「これからも、私達プリキュアのリーダーとして、みんなを
支えてください。」

なぎさ「・・・みんな・・・」

なぎさは、涙を堪えながら言った。

なぎさ「ありがとう・・・本当に・・・」
のぞみ「なぎささん!」

突然、のぞみがなぎさに抱きついてきた。

なぎさ「わっ!」

のぞみ「私、なぎささんのこと大好きです！すごく好きです！」
なぎさ「どうしたの？いきなり・・・」

ほのか「駄目よ、のぞみさん！なぎさは私のものよ！」

のぞみ「ちよつとぐらいいいじゃないですか！」

ひかり「のぞみさんずるいです！私だってなぎささん大好きですよ！」

うらら「私だって！」

響「あ、ずるい！私も！」

ほのか「もう！私が一番なぎさを愛してるのに！」

なぎさ「ちよつ・・・！みんな落ち着いて・・・わああああああ
っ！！」

その様子を、窓の外から見つめる人物が・・・

湊「なぎさ・・・おめでとう・・・」

面と向かってお祝い出来ない、切ない湊であった。

番外編「Happy Birthday なぎさ」(後書き)

なぎさは実際は今年で21歳となりますが、この小説ではずっと15歳のままでやっていますので。
なぎさ、おめでとう！

ブラックのオリジナル必殺技集

「プリキュア・ブラックキック」

高く跳躍すると同時に右足にエネルギーを集中させ、敵に勢いよくキックを放つ。

ブラックのお気に入りの単独必殺技。

モデルは仮面ライダージョーカーの「ライダーキック」

「プリキュア・ブラックパンチ」

ブラックキックと同じ要領で放つ必殺パンチ。

右腕にエネルギーを込めて相手を思い切り殴り付ける。

とどめの一撃以外に、ブラックキックへの繋ぎとして使われることもある。

モデルは仮面ライダージョーカーの「ライダーパンチ」

「プリキュア・ブラックグレネイド」

ブラックが戦いの中で編み出した、ブラックパンチを更に強化させた必殺技。

空中で両腕にエネルギーを込めた後、相手めがけて急降下し、左腕と右腕で交互に殴り付ける。

モデルは仮面ライダーダブル・HJの「ジョーカーグレネイド」

「プリキュア・ブラックエクストリーム」

ブラックが戦いの中で編み出した、ブラックキックを更に強化させた必殺技。

限界までエネルギーを込めた両足で、相手にキックを放つ大技だがエネルギーを大きく消耗する為、使われることは少ない。

モデルは仮面ライダーダブル・CJXの「ダブルエクストリーム」

第12話「本当の新たなる戦い」

・ ・ ・ それから一ヶ月が経過し、コンカロードが倒されたことで人々は再び平和な生活を過ごしていた。

勿論、なぎさも・ ・ ・

なぎさ「・ ・ ・ と、だいたいこんな感じかな。」

なぎさ、ほのか、ひかりの三人はTACO CAFEに集まっていたものように平和な日常を過ごしている。

そこでなぎさは、死後の世界での出来事を二人に話していた。

海東湊と出会ったこと、キュアパイレーツに二度も敗北したこと、自分達の命を狙う悪と戦ったこと、生き返る為の試練をパイレーツから受けたこと・ ・ ・ ・ ・ そして、ほのかを助けたことを。

ひかり「・ ・ ・ そんなことがあったんですか・ ・ ・ ・ ・」

ほのか「やっぱり、あの時私達を助けてくれたのはなぎさだったのね。」

なぎさ「うん・ ・ ・ あれからもう一ヶ月か・ ・ ・ 早いなあ・ ・ ・ ・ ・」

ひかり「そうですね。なんだかこの一ヶ月がすごく早かったように感じます。」

ほのか「このまま何も無いといいけど・ ・ ・ ・ ・」

なぎさ「どうかしたの？」

ほのか「何か・ ・ ・ とても嫌な予感がするの・ ・ ・ ・ ・」

なぎさ「気のせいだよ、きつと。」

メップル「気のせいなんかじゃないメポ！」

ミップル「ミップルとメップルも凄く邪悪な力を感じるミポ！」

ひかり「えっ!？」

ほのか「なぎさ!」

なぎさ「うん!」

三人はすぐにTACO CAFEを後にし、街へと急いだ。

なぎさ「何！？あれ！」

三人の目の前で、見たことのない敵がブルーム、イーグレットと戦っていた。

ゾーン達である。

二人の力の前にゾーン達は次々と倒されていくが、さすがに二人で相手にするには数が多すぎる。

ひかり「何だかわかりませんが、敵であることに間違いなさそうですね。」

なぎさ「ほのか、ひかり、いくよ！」

ほのか「ええ！」

三人はメップル達が変身したアイテムを使い、プリキュアに変身する。

なぎさ、ほのか「デュアル・オーロラ・ウェイブ！」

ひかり「ルミナス！シャイニングストリーム！」

三人の体が光に包まれ、瞬時に変身が完了した。

ブラック「光の使者、キュアブラック！」

ホワイト「光の使者、キュアホワイト！」

ルミナス「輝く命、シャイニールミナス！」

ホワイト「闇の力の僕たちよ！」

ブラック「とつととお家に帰りなさい！」

その言葉で何人かのゾーン達が三人に気が付き、一斉に襲い掛かってきた。

ホワイト「ブラック！」

ブラック「うん！」

それに対して、ブラックとホワイトは怯むことなく立ち向かっていく。

ブラック「でやあっ！」

ブラックは自慢の力で次々とゾーン達を薙ぎ倒していく。

ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

必殺パンチで一気に数人を撃破するブラック。

そこへ援軍が襲い掛かるが

ホワイト「はああっ！」

すかさずホワイトがキックをたたき込み、ゾーン達を後退させた。

ブラック「ホワイト、ナイス！」

そこへ、ブルームとイーグレットも駆け付ける。

ブルーム「ブラック！」

イーグレット「ホワイトにルミナスも！」

ブラック「二人共、あいつら一体何者なの？」

イーグレット「私達もよくわからないんですが、どうやらルーイン

帝国とかいうらしいです。」

ルミナス「ルーイン帝国・・・？」

そしてブラック達は、ブルームとイーグレットからルーイン帝国のことについて聞かされた。

ブラック「そんな奴らが地球に来るなんて・・・」

ホワイト「でも、魔王って一体何のことなの？」

ブルーム「それは私達にも・・・」

メップル「メップル達も知らないメポ。」

ブラック「じゃあ、一体何なんだろう？」

Gゾーン「お喋りはそこまでだ。」

そこへ、ジエネラルゾーンがやって来た。

Gゾーン「こちらもありのんびりしてられないのでな、わかったらさっさと魔王を渡しな。そうすれば貴様らだけでも助けてやってもいいぞ。」

ブラック「私達はそんなもの持ってないし、あつたとしても貴方達なんかには渡さない！みんな、いくよ！」

Gゾーン「馬鹿な奴らだ・・・いけ、ゾーン共！」

次の瞬間、ブラック達は大量のゾーン達と再び戦闘を開始した。
ブルーム「イーグレット！」

イーグレット「ええ！」

ブルームとイーグレットは抜群のコンビネーションでゾーン達を圧倒していく。

ゾーンがどちらかに切り掛かっても、すぐにもう一人がゾーンを攻撃する為、ゾーン達に全く反撃の隙を与えない。

しかし、コンビネーションならブラックとホワイトも負けてない。

むしろ彼女達の方が上と言った方がいいだろう。

ホワイトがゾーンに隙を作らせれば、すかさずブラックが必殺技をたたき込み、ブラックがそうしてゾーンを撃破すれば、ホワイトがブラックに襲い掛かるゾーンを再び食い止める……

そうしている内に、ブラック達はほとんどのゾーン達を撃破していた。

ブラック「残りは一気に決めるよ！ルミナス！」

ルミナス「わかりました！」

ルミナスは高く跳躍すると、ゾーン達に必殺技を放った。

ルミナス「ルミナス！ハーティエル・アンクション！」

彼女が放った光を浴びて動けなくなるゾーン達。

ブラック「ホワイト！」

ホワイト「うん！」

ブルーム「イーグレット、私達も！」

イーグレット「ええ！」

ブラックとホワイト、ブルームとイーグレットはそれぞれ手を繋ぎ、ブラック、ホワイト「プリキュア！マーブルスクリュー・マックスー！！」

ブルーム、イーグレット「プリキュア！ツイinstリーム・スプラッシュー！！」

同時に必殺技を放った。

ブラック達の技を受け、ゾーン達は全員消滅した。

ブラック「残るはあんただけよ！」

Gゾーン「おのれ……！」

ブルーム「ブラック！危ない！」

一人残ったジエネラルゾーンがブラックに襲い掛かるが、ブラックは全く動じることなく必殺技の構えに入り、右足に力を集中させていく。

ブラック「はあああああつ……！」

Gゾーン「おりゃあ！」

ブラック「プリキュア！ブラックキック！」

ジエネラルゾーンの剣を素早くかわし、必殺のキックを命中させた。Gゾーン「ぐあああああつ……！」

ジエネラルゾーンは勢いよく吹っ飛ばされ、そのまま消滅した。

ブルーム「やった！」

イーグレット「さすがブラック！」

敵を倒したブルームとイーグレットは共に勝利を喜ぶ。

しかし、ブラック達は……

ホワイト「ブラック、今の……」

ブラック「…うん。」

ルミナス「新しい敵……ですよ……」

ブラック「ホワイト、ルミナス、これからも今まで以上に気を引き締めていくよ。」

一方その頃、ルーイン帝国のとある場所で怪しい影が動こうとしていた。

「……皇帝の手下の連中が動きはじめたか……」

「……はい、既に地球に何人か兵士を送り込んだようです。」

「……だがそれもプリキュア達によってあっさり倒されるとは、口ほどにもない奴らだ。」

「……あの……あまりあの方達を見くびらない方がいいのでは？」

「……わかつている。だからこそ、こうして再びゲドラ様が俺達」

を集めたんだじゃないか。」

ゲドラ「そうだ。奴らが再び動き出した今、我々も遅れをとるわけにはいかぬ。」

「???」その通りです。「ゲドラ「ライガ、ゼイブ、ガイン、マリア、お前達四天王にはこれまで以上に働いてもらっぞ。全宇宙を支配するのは、我々革命軍なのだから！」

ライガ「心得ております。」

ゼイブ「お任せを。」

ガイン「御意。」

マリア「……………」

ゲドラ「マリア、返事はどうした。」

マリア「…承知しました……」

ゲドラ「それでよい。」

シヨウキら前皇帝軍と同時に、ルーイン帝国でもう一つの影が動きだそうとしていた。

なぎさの新たな戦いは、まだ始まったばかり……………

果たして彼女は、仲間と共にこの強敵に勝つことが出来るのか!?

第12話「本当の新たなる戦い」（後書き）

なぎさ「遂に新章開始！この調子でガンガン更新しちゃってよね！」

すみません。もうしばらく『Universe&Wing』
の方を優先します。

なぎさ「・・・ありえない！！」（泣）

というわけで、しばらくこっちでもストーリーに関する要望を募集
します。

因みに次回は湊となぎさが再会します。

登場人物紹介

（主人公Side）

・美墨なぎさ／キュアブラック

言わずと知れた初代プリキュアにして、本作の主人公。

コンカロード一味との戦いで一度命を落としており、その際に湊と出会う。

この件をきっかけにほのかを守りたいという想いが一層強まり、以来今よりも更に強くなることを決意。

そして、ほのかや湊と共にルーイン帝国革命軍との戦いへ挑むことになる。

ファウストKの小説でのみ使用するオリジナル技は、全てほのかを守る為に自ら編み出したもの。

CV：本名陽子

・雪城ほのか／キュアホワイト

なぎさと同じく、初代プリキュアの一人。

コンカロード達との戦いでなぎさと束の間の別れを経験した。

彼女が生き返った今では出来る限りそのことを思い出さないようにしながら、なぎさや湊と共に帝国革命軍との戦いに挑む。

なぎさが一方的に自分を守るようになったことに対して、僅かながら嫌気が差している。

CV：ゆかな

・海東湊／キュアパイレーツ

死後の世界でなぎさ達が出会った新たなる戦士。

世界を又に掛ける大泥棒、海東大樹／仮面ライダーディエンドの妹であり、兄と同様に違う世界へ移動出来る力を持つ。

また、プリキュアキーを使うことで他のプリキュアの姿と能力を使

用することが出来る。

本作では、なぎさを死後の世界から生き返らせようとしたり、自らを鍛えてほしいと頼む彼女にあっさり協力したりと、何かとなぎさに対して積極的。

本人曰く彼女の力に無限の可能性を感じたかららしいが、どうやら理由はそれだけではない様子・・・

イメージCV：野田順子

・九条ひかり/シャイニールミナス

なぎさ、ほのかと共に邪悪と戦う光の戦士。

コンカロード達との戦いの際に、なぎさが死んだことで戦意喪失に陥ったほのかを説得して再び立ち上がらせたこともある。

なぎほのがメインの本作では出番が若干少なめ。

CV：田中理恵

・メツプル

ブラックのパートナー。

光の園の選ばれし勇者。

CV：関智一

・ミツプル

ホワイトのパートナー。

希望の姫君。

CV：矢島晶子

・ポルン & amp; ルルン

ルミナスのパートナー。

ルミナスの出番が少なめな為、彼らもまた出番が少ない。

敵Side)

・ベムズン星人ゲドラ

「ルーイン帝国革命軍」を率いる首領。

惑星ベムズンに存在するルーイン帝国には二つの敵対する勢力が存在し、それがシヨウキ達前皇帝の部下達を中心とする「皇帝軍」とゲドラ率いる「革命軍」である。

前皇帝を嫌っており、彼が死んだ直後から自分が皇帝の座を狙い続けるようになった。

皇帝軍から帝国の全てを奪った後には全宇宙の支配をも企んでいる。
イメージCV：若本規夫

・チュラス星人ライガ

ゲドラが自身の部下達の中から選抜した選りすぐりの四人「革命軍四天王」の一人。

品の良い喋り方をするが、戦闘時にはとにかくヒステリックになる。電気技を得意としている。

イメージCV：森田成一

・ペドラン星人ゼイブ

四天王の一人。

四人の中で最も攻撃的かつ短気。

しかしながら実力は高く、小さな軍隊なら一人で全滅させてしまうほどの強者。

イメージCV：岸尾大輔

・サーグ星人ガイン

四天王の一人。

ゼイブとは対照的に冷静で、現場にはあまり出向かない。

とにかく頑丈な体を持ち、更に亜空間バリアを張ることも出来る。

モデルは『忍風戦隊ハリケンジャー』のサーガイン。(四天王で特

定のモデルがいるのは彼のみ)

イメージCV：岡本美登

・フェクス星人マリア

四天王の一人で革命軍の紅一点。

実力は非常に高く、四天王最強と言われている。

しかし彼女自身にはあまり侵略の意志は無く、組織のやり方に対して疑問に思うところも多いが、それでも彼らに協力しようとする理由は不明。

他の三人よりも非常に人間らしい容姿をしている。(推定年齢15歳)

イメージCV：堀江由依

第13話「湊との再会」(前書き)

なぎさ「ヴァルゴ・ゾディアーツの声って、どこかで聞いたような
気が・・・」

ひかり「多分気のせいですよ」 笑顔

第13話「湊との再会」

なぎさ「……………」

なぎさは、自室ですっと黙り込んでいた。

メップル「なぎさ、どうしたメポ？さつきからずっと黙ってるメポ。」

なぎさ「…やっぱり、このままじゃ駄目だね。」

メップル「メポ？」

なぎさ「今の私は、悲しいくらい弱い…弱すぎるよ……………」

メップル「そんなことないメポ、なぎさは十分強いメポ。」

なぎさ「ううん、弱いよ。現に私は、ほのかを…悲しませた……………」

なぎさの脳裏に、ラスとの戦いの記憶が浮かび上がる。

メップル「メポ……………」

なぎさ「こんなんじや全然駄目。あの時以来、絶対ほのかを守るって決めたんだから。その為には、もっと強くならなきゃいけないの！あの、キュアパイレーツみたいに……………」

その時、なぎさはあることを思い出した。

なぎさ「そうだ……………」

スカートのポケットに手をつ込んだなぎさは、そこから一枚の紙切れを取り出した。

メップル「それは何メポ？」

なぎさ「あの子が…キュアパイレーツがくれたの。困ったらここに来なさいって……………」

メップル「…行く気メポ？」

なぎさ「当然でしょ。私は…もつと力がほしいの！」

メップル「なぎさ……………」

なぎさ「そうと決まれば、早速行くよ！えーと、この住所は……………」

「…つて、家のすぐ近所じゃん！全然知らなかった…まあいいや。行くよ！メップル！」
そして、なぎさはメップルと共に彼女の元へ向かった。

同じ頃、とある街の片隅で…

シヨウキ「ディアマンテ星人ドン・モヤイダ、後は任せたぞ。」

ドン・モヤイダ「わかってるな？報酬は高くつくぞ。」

シヨウキ「ああ、魔石を奪えたならそれ相応の報酬を払ってやる。もつとも、成功したらの話だな。」

ドン・モヤイダ「この私がプリキュアに負けると思っているのか？」

シヨウキ「奴らは手強いからな。」

ドン・モヤイダ「ふん、任せろ。私に抜かりはない。」

シヨウキ「そうか、ならやってみるがいい。」

そう言つてシヨウキは去つていった。

ドン・モヤイダ「ふん…さて、魔石を探すか…」

ゾーン達を連れて、ドン・モヤイダは歩きだした。

なぎさ「ここが…」

ドン・モヤイダが行動を開始した頃、なぎさとメップルはとある一軒家に来ていた。

なぎさ「こんなところに住んでたなんて…ベローネ学院のすぐ近くじゃん…」

そんなことを考えながら、なぎさは呼び鈴を鳴らした。

するとすぐにドアが開き、中から一人の少女が姿を見せた。

少女はなぎさの顔を見ると、一瞬で笑みを浮かべた。

なぎさ「湊…」

湊「…待つてたわよ、なぎさ。」

なぎさが頼つてきた彼女の名は海東湊。

またの名を、キュアパイレーツ。

更に同じ頃、ほのかはミップルと一緒に街を歩いてた。

ミップル「ほのか、どうして今日はなぎさと一緒じゃないミポ？」

ほのか「・・・え？ああ、私だってたまには一人になりたい時くらいあるわよ。」

ミップル「でも、やっぱりほのか最近なんか変ミポ。なんだか、なぎさのことで凄く悩んでる様に見えるミポ。」

ほのか「それは・・・！その・・・。」

ミップルが言ったことはまさしく凶星だった。

確かにほのかは、現在なぎさに対する想いが少し変わっている。

あの日、自分の目の前でなぎさは命を落とし、同時に自分も今まで経験したことの無い悲しみを味わった。

結局、なぎさは再び帰ってきたものの、あの出来事は今も忘れない思い出として残っている。

出来るだけ思い出さないようにはしているが、たまに思い出してしまった時は本当に不安になる。

更に、ほのかを悩ませているのはそれだけでない。

あの事件をきっかけに、なぎさがやたらと自分を守ってくるようになったことである。

この前なぎさから、戦いで命を落とした彼女達は死後の世界を訪れ、そこで海賊を名乗るプリキュアと出会ったことを聞かされた。

その時の出来事が原因なのかは知らないが、なぎさは明らかに今まで以上に自分を守ることに一生懸命になっている。

自分は死後の世界にいなかった為詳しくは知らないが、正直彼女の行動は素直に喜べない。

守ってくれるのは確かに嬉しいけれど、自分達はこれまで共に戦ってきた仲間。

今更そんなに守られても、はっきり言っておりがた迷惑でしかない。一応そのことは今度なぎさ本人にも伝えるつもりだ。

ほのか「私はただ、もっとなぎさに頑張ってもらいたいだけよ。」

ミップル「ミポ・・・？」

これは、自分となぎさ二人の問題。
だから二人の力で解決させなければ意味がない。
そう自分に言い聞かせ、ほのかは再び歩こうとした。
その時、目の前に怪しい集団を見つけた。
ミップル「ほのか、あれって・・・」
ほのか「うん・・・ルーン帝国・・・」
彼女の目の前には、数人のゾーン達を連れたドン・モヤイダが立っていた。

湊「待つてたわよ、なぎさ。」
なぎさ「・・・やっぱり、はじめから私があるとわかっててこの場所を教えたのね。」

湊「ええ、貴方はきつと私を頼ってくる。あの世界で別れた時からそう予感してたわ。」

メップル「なぎさ、この子がこの前話してた子メポ？」

湊「貴方がメップルね。はじめまして、海東湊です。」

メップル「よろしくメポ。」

湊「それで、一応聞いておくけど、私に何の用かしら？」

なぎさ「・・・湊・・・」

湊「？」

すると突然、なぎさは湊に向かって深く頭を下げた。

メップル「なぎさ!？」

なぎさ「お願い!私をもつと鍛えて!」

メップル「いきなり何言ってるメポ!？」

しかし、なぎさは気にせず続ける。

なぎさ「一度死んでみて、大切な人と引き裂かれる悲しみを嫌と言うほど思い知った。それに、ほのかが悲しんでるところを見て私自身も凄く辛かった。私、もうこれ以上ほのかを悲しませたくないの!だから湊、お願い!私をもつと強くして!」

湊「・・・頭を上げなさい。」

なぎさ「湊……?」

湊「…当然、オツケーに決まってるでしょ。その為に貴方をこっへ呼んだんだから。」

なぎさ「じゃあ、鍛えてくれるの?」

湊「ええ。」

なぎさ「あ……ありがとう!湊!」

湊「どういたしまして。」

なぎさ「それじゃ、早速……」

湊「その前に、少しやる事が出来たわよ。」

メップル「向こうから邪悪な気配を感じるメポ!」

なぎさ「まさか、ルーイン帝国?」

湊「ええ、行くわよ。」

なぎさと湊は、共に邪悪な気配のする方向へ急いだ。

着いた先では、ドン・モヤイダがゾーン達に人々を襲わせていた。

湊「やつぱり……」

なぎさ「なんて酷いことを……」

ほのか「なぎさ!」

そこへ、ほのかとミップルが走って来た。

なぎさ「ほのか!来てたの!?」

ほのか「ええ……ところで、貴方は?」

湊「私は海東湊。それよりも、まずはあいつらを片付けるわよ。」

なぎさ「ほのか!」

ほのか「ええ!」

湊「プリキュアチェンジ!」

『キュア、パイレーツ!』

なぎさ、ほのか、「デュアル・オーロラ・ウェイブ!」

三人はそれぞれの変身アイテムを使ってプリキュアに変身する。

パイレーツ「変革を呼ぶ自由の海賊!キュアパイレーツ!」

ブラック「光の使者!キュアブラック!」

ホワイト「光の使者！キュアホワイト！」
ブラック、ホワイト「ふたりはプリキュア！！」
ホワイト「闇の力のしもべ達よ！」
ブラック「とつととお家に帰りなさい！」
ゾーンやドン・モヤイダもそれに気付いたらしく、こちらを向く。
ドン・モヤイダ「見つけたぞ、プリキュア。」
ブラック「ルーイン帝国！これ以上貴方達の好きにはさせないんだからね！」
ドン・モヤイダ「ふん、素直に魔石を渡せばおとなしく撤退してやつてもいいぞ。」
ブラック「そんなものは無いわ！」
ドン・モヤイダ「なら仕方ない。ゾーン共、やれ。」
その言葉で、ゾーン達が一斉に襲い掛かる。ブラックブラック「パイレーツ！ホワイト！いくよ！」
ホワイト「ええ！」
ブラックとホワイトは、共にゾーン達に立ち向かっていく。
ブラック「でやあっ！」
ゾーン「うわあ！」
ブラックは得意のパンチとキックでいつもの様にゾーン達を倒していく。
ホワイト「はっ！」
その一方で、ホワイトも少しずつゾーン達を攻撃して弱らせていく。パイレーツ「さて・・・派手にいってやるわ！」
そしてパイレーツは、決め台詞を言うと同時にプリキュアキーを使って変身した。
『キュア、アルガティア！』
Pアルガティア「はあっ！」
パイレーツの変身したキュアアルガティアは、拳銃とショットガンを駆使してゾーン達を次々と狙撃していく。
Gゾーン「くっ！おのれえっ！」

近くにいたジェネラルゾーンがアルガティアに襲い掛かるが、彼女は素早く攻撃をかわして彼の背後に回り込み、一斉に二丁の銃を乱射してジェネラルゾーンをあっという間に撃破した。

ホワイト「はああっ！」

そして、ホワイトのキックが最後のゾーンを撃破したその時、

ホワイト「!？」

ドン・モヤイダ「ふん。」

突然ドン・モヤイダがホワイトの目の前に現れ、彼女に殴りかかってきた。

ブラック「ホワイト！」

ホワイト「・・・！」

ブラック「プリキュア！ブラックパンチ！」

ブラックはすかさず彼にパンチを放ち、ホワイトを守るのに成功した。

ブラック「ホワイトは・・・ほのかは絶対に傷つけさせないんだから!!!」

ホワイト「・・・なぎさ・・・」

しかし、攻撃を受けたはずのドン・モヤイダは全くダメージを受けている様子は無かった。

ブラック「な・・・なんで!？」

ドン・モヤイダ「ふ・・・残念だったな。私達ダイヤモンド星人の皮膚は地球上のどんな物質よりも硬いのだよ。そしてこれを碎ける武器は地球には無い！」

Pアルガティア「そう、確かにその通りよ。」

そこへ、アルガティアがやって来た。

ブラック「パイレーツ・・・」

Pアルガティア「ただし、地球にはね。」

ドン・モヤイダ「？」

Pアルガティア「プリキュアチェンジ！」

『キュゥア、コズミック!』

キュアコズミツクに変身したパイレーツは、素早くドン・モヤイダめがけて走りだした。

Pコズミツク「でも、宇宙の力なら・・・どうかしらね？」

ドン・モヤイダ「貴様、まさか・・・！」

Pコズミツク「プリキュア！コズモブレイカー！」

ドン・モヤイダ「うわあああっ！」

コズミツクの光の拳が勢いよく炸裂し、次の瞬間ドン・モヤイダの皮膚が音をあげて砕けた。

ドン・モヤイダ「なっ・・・！」

Pコズミツク「今よ、二人共！」

ブラック「ホワイト！」

ホワイト「ええ！」

ドン・モヤイダ「くっ・・・ん？」

見ると、二人はドン・モヤイダに両手を向けていた。

ブラック、ホワイト「プリキュア！マーブルスクリュー・・・マツクスー！！！」

そして、黒と白の光が放たれ、勢いよくドン・モヤイダに命中した。

ドン・モヤイダ「ぐああああああああっ！！！」

パイレーツ「・・・終わったわね。」

ドン・モヤイダ「馬鹿な・・・この私が、プリキュアになど負けるはず・・・が・・・」

ドン・モヤイダはゆっくりと倒れ、爆散した。

ブラック達は全員変身を解く。

なぎさ「ふう・・・やったね。」

ほのか「ええ・・・」

戦いには勝ったが、ほのかには何か満足出来ないことがあった。しかし、その不満は湊に消されてしまう。

湊「いい戦いぶりだったわよ、なぎさ。」

なぎさ「・・・うん・・・やっぱり私、まだまだ弱いよ・・・」

「

湊「大丈夫、貴方はこれからもつと強くなれるわ。」
なぎさ「本当？」

湊「ええ、明日から早速鍛えていくわよ。」

なぎさ「湊・・・本当にありがとう！」

気が付くとなぎさは、湊に抱きついていていた。

ほのか「・・・なぎさ・・・」

その様子を見ていたほのかは、どこか寂しげ表情になる。

ほのか「なぎさ・・・私、今日はもう帰るね。」

なぎさ「え？あ・・・うん。」

ほのか「じゃあね、バイバイ。」

なぎさ「うん、また明日。」

そして、ほのかはミツプルと共に帰っていったが、なぎさはほのかの様子が少しおかしいことに感付く。

なぎさ「・・・ほのか・・・？」

しかし、今のなぎさにはほのかの想いはわからなかった。

・・・わかるはずもなかった。

第13話「湊との再会」(後書き)

今回からたまに「デカレンジャー」の宇宙人を出していきますが、
一応この世界にはアリエナイザーは存在しない設定になっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5126u/>

プリキュアオールスターズAnother Story ~キュアブラック、光の使者の新たな

2011年12月15日02時47分発行